

## 一、軍部と民間指導層の動き

### 戦時下の経済業務

宮古支庁経済課長(当時) 東 風 平 恵 令

#### 青木切るべし

米の配給は最後までやりました。

馬や豚のある人もいましたし、住民の食生活は軍隊よりよかったと思います。砂糖をうんと配給しましたから、酒をつくる方もおりました。

非戦闘員は全部疎開させる予定でしたが、残ったんですね。残されたものは自活班と位置づけられました。輸送船の関係で、運びきれずに残ったわけですが、自活班ということで、軍に奉仕する立場ですから、農家の畑はみんな軍需品の芋や野菜を作っていたという形ですね。

たとえば、鮮魚組合は供出班長の指示で鮮魚を供出して軍の経理部に納めますし、経理部は供出班長を通じて鮮魚の供出を命じてきました。

軍の主力がまいます前に、親展の文書が、県の経済部長から宮古支庁長あてにまいましたね。かや、たば、やわら綱を何万準備しておくようにということがあって、最初に工作隊がやってまいりました。それからあとに主力の上陸がありましたね。

有無をいわさない時代ですね。国家総動員法が実施されて、勅令

で物の配給や価格も統制されていましたね。生産から配給まで統制されていましたが、県知事がそれをやり、宮古では支庁長がやるという次第ですね。

ところが支庁長の納戸桑吉さんが病気で、そのために、実際の仕事は私にまかされたわけです。私は当時宮古支庁の経済課長でしたが、納戸支庁長は私に、「民側に立ってやってくれ」と頼まれました。

軍が宮古に上陸してきてから、そのやることなすことは大変なものでした。私は支庁長の命に従って、従来の線でおし進めたんですが、軍側は、「頭をきりかえ、経済業務はすべて自分らにうつせ」とせまりました。そのとき私は、はっきりいいました。

「それはできません。戒厳令は出ていないじゃありませんか。私は、軍命令ではなく、地方長官の命で動かなければなりません。」と。

「よろしい、わかった。」と答えましたが、しだいにひどすぎるものが現われてまいりました。

そこで、私はある夜ひそかに会合をもち、軍に対する強硬派の青木雅英県会議員、新城長保宮古警察署長と三人で、「あくまで民側に立って、お互い覚悟をきめて三人でやろう。」と誓い合いました。

先ず最初に、「青木切るべし」の声が軍側で起りました。供出成績が不良だ、それは、「青木のしわざだ。青木がそそのかしたのだ。」というのです。

特にこの声は経理部で起りました。早速情報を青木県議に伝えました。そのうち、軍内部ではうはいとこの声が起るようになった

ので、そのことを伝えると、県議は、共同戦線をやったが、現在のままではいかんから、策を変えようということになりました。

今の平良市下里在の公設市場の東側の民家の二階にあった県農学会支所がありましたが、そこで部隊長以上と、三人で、定期的に会合して話し合おう、軍民協力して立ち上がる体制をつくろう、と軍に提案しました。師団長も、それはいい考えだと応じ、費用は全部軍がもちましようということで、親睦機関の三日会がもたれることになりました。

「青木県議と、樺淵師団長との二人の仲は、それ以後親しくなりました。師団長の長男の戦死が伝わったときは、二人は抱き合って泣いていました。」

このように親しくなったのですが、私どもは、それでも基本はくずしません。協力すべきは協力するが、あくまで軍のやり方で行き過ぎがあると、批判していくという線で行きました。

「青木切るべし」の次には、「新城署長切るべし」の声がおこりました。

三日会では仲良くしていったんですが、新城署長は、何か問題が起ると、軍の横暴をつきました。あっちこちで、軍のやり方はまちがっている、といいました。それが軍に聞こえ、「新城署長切るべし」の声が起ったわけです。それで、署長は、首里署長に転動して行きました。

青木県議は軍に信用されていきましたから、飛行機を利用することができました。当時、宮古からは三人の県議がでていましたが、一人は本土にいました。それが戦前の最後の県会となったのですが、

いのか、と迫りました。

「しかたがありません」と答えると、「お前のやったことは利敵行為だ」といいます。

「燃えたのは、不可抗力です。県知事がいなくなっても、内務大臣がいる。私はその決定にどこまでも従います。」と主張しました。

「お前は理くつばかりこねている。それは何の為か。」と師団長は申します。私はそれに対し、「勝ち抜くためです。ここは外地ではなく、本土です。その点で、今までの戦争とはちがう筈です。戦争に勝ち抜くために軍に協力はするが、民の生活を守るのは行政官の仕事です。」というてやった。さすがに師団長は、「よくわかった。」というてくれました。

しばらくして、もう一度よばれたとき、もっと考えてみようという策を考えました。民の生活を軍が保障するならば、あなたのいうこともきいてあげよう、ということにしました。

三日会のあった頃、「軍民協力要綱」というものが、三名打ち合わせて作ったのですが、それを実際に行なうことになりました。食糧は軍が全部管理して配給してくれることになりました。経済課長は、月に一回、軍の将校や兵の食事を視察しました。

十九年の中旬、先島定期船の貨客船も沈められましたが、軍は食糧確保のため、西表島の船浮に穴を掘って中継地を作っていました。百屯ほどの船で台湾から、夜間を利用して、そこに運んできて集積していました。それを更に、宮古の方に運んでいこうというわけです。その基地には山崎少将が司令していました。私も、そ

沖繩県会があるというので、青木県議はすぐ飛行機を利用して那覇に向いました。もう一人の県議は経済課長の私を通じて、飛行機の利用を申し出ましたが、軍は問題にしませんでした。

青木県議からの便りがありました。それが最後の手紙になったのですが、衣料品を船に積んだということでした。「これが、私の最後のおみやげになると思う。大事に保管して、配給してくれ」ということがかかれ、那覇にあったものをかきあつめて送ったということが書かれていました。

その衣料品が積みこまれたという豊坂丸と大建丸が入港する朝、私は港の見える郵便局の丘に立っていました。ところが、グラマンがきて、じくじくコースでにげる両船をおそい炎上させてしまいました。午後三時頃までただぼうせんと、それをながめていました。

青木も新城も島を去り、残るは私一人となりました。一人でも、軍に強く当たっていかねばならないと、決意をかためていました。

二二は外地ではなく、本土です。

平良に二つの砂糖倉庫がありました。軍がそれを軍に引き渡すよう要求してきました。

私は、それをこぼしました。国には行政機関があるんだから、それがある限り、私はどこまでもその決定に従うだけだと答えました。

しかし、その二つの砂糖倉庫が空襲で燃えてしまいました。

師団長に呼び出され、お前が軍にさからうから、大量の砂糖が燃えてしまったではないか、こうなっても、お前はいうことをきかな

の中継地を視察しましたが、そこには、朝鮮の人や台湾の人が働いていました。穴掘りが終って、七、八十人ほどいた朝鮮の方は、宮古にやってきて、平良市内の第二小学校にいましたが、西表にいた頃は、マラリアではらがふくれていて、見ていて気の毒でした。あつかわれ方はひどく、ちよっとなまけると足でバツとけられるというものでした。

この船浮中継地に集積されております食糧の中には、民への割り当ての分もあります。しかし、民には、既に輸送船がありません。輸送は軍に頼らねばなりません。軍優先だということで、民の分を運んでもらえなければ、民は日ぼしにならねばなりません。私の強がりにも限界がありました。それで、民の生活を軍が保障してもらおうという条件で、管理権をゆずったという次第です。

考えてみると、現在のどの程度まできているか、軍のおもわくも考えないで、民のためと、ねばったと思います。「切つてやる」という処まできていたんですね。

戦後わかったことですが、納見という師団長は、宮古支庁経済課つまり私のやり方に、ひどく怒っていたんですね。明知という前の宮古支庁長に二十年二月に出された納見中將の手紙がそれをかいてあるんですね。

その手紙は、納戸支庁長が、軍のままにならないので、同じ広島県出身であり、台湾在任中親交のあった明知さんに、納戸さんの後任にきてくれという要請の手紙だったんですね。納戸さんは、第三十二軍の長参謀長と同じ福岡県人だったんですがね。要するに、意のままにならない民の抵抗に業をやしていた証拠ですよ。

これは、十九年の初め頃の話ですが、軍に対する抵抗を始めるも  
となる話です。

当時、燃料は血の一滴といわれていましてね、漁船の場合、漁期  
は近いが、燃料がたりない、という頃でした。ここで、朗報がやっ  
てきたんです。

南方視察からの帰りに、那羅に立ち寄った東条首相が、島田知事  
や経済部長に話ったということです。燃料をもってきてくれること  
はできないが、自分らでとりにいくならいくらでもかまわないとい  
うことでした。

このことを伝えると、宮古の水産業者は、せひやろうということ  
になり、平良の町長に了解してもらって、大野山林の松木で船を改  
装し、九隻の漁船が南方に行きました。四月の九日に出発し、危険  
な海を往復して、およそ二か月後の六月十一日に、石油を満載して  
帰りました。

ところがです。折角苦労してもってきた燃料を、棧橋の近くに  
いた陸部隊がとり上げてしまいました。船をもです。民は泣きねいり  
しなければなりませんでした。

軍の方も民のやることには不満だったんですね。食糧営団宮古支  
所では、所長は台湾に食糧を求めにいったんですが、帰ってきませ  
ん。それでも、そこで、終戦まで、配給は続けられました。一か月  
に一度、AからDまでの級差と年令別で決められた基準で、民には  
配給が行なわれました。軍はきりつめて民に出していませんね。

私は、添道の親類の疎開先で食事はさせてもらい、配給に通いま  
した。添道に宮古支庁がうつった、というのはまらがいですね。街

私は兵事主任ではありませんでした。在郷軍人指導主任という  
ことで、昭和十七年十一月から、平良町の兵事課につとめていまし  
ました。

軍隊は上等兵で終っていたんですが、沖縄連隊区司令官からの電  
報で、伍長に昇任したんです。長いこと、在郷軍人としてがんばっ  
たというわけですね。兵事主任の松川さんも伍長でした。

在郷軍人の訓練というのは十日に一回の割合で行なっていたんです  
ね。各班の班長を通じて報告を受けていたので、在郷軍人の一人一  
人について、誰れはどこで何をしている、ということなど、みん  
な暗記していました。

役所のある所は広場だったでしょう。あそこで訓練しましたが、  
戦争がいよいよよとなったら、平良町全部の海岸線の防空壕掘りをし  
たんですよ。

豊部隊命令で八七〇名の動員令がやってきましたとき、およそ半数に  
あたる四〇〇名ほどについて、つかえしたことがありました。

兵事主任の松川英市さんは、これら四〇〇名については、兵事課  
に關係ないからということだったんです。

憲兵が、役場にきて名簿を調べていたんですが、それによって、  
動員令をかけてきたんですね。その半分も、つかえしたわけです  
から、軍は平良町のこの挙に對し疑いをもったようです。

細竹の連隊（歩兵第三〇連隊）に奉公隊の訓練召集をかけて点検  
をやりましたね。町の兵事課を通さないで、町内会長や部落会長を  
通じて十七歳以上の名簿を提出させ、それによって召集したんで  
す。

の東にある東川根の民家に書類を疎開させてありましたね。支庁長  
は病弱だし、総務課長は城辺の方に疎開していました。支庁の仕事  
というのは、経済課の仕事だけでしたからね。妻子を台湾に疎開さ  
せてありましたから、とびまわれたわけですね。

終戦の直後にストリート大尉が最初に島にきました。その次に正  
式にきたのが、チェスという少佐ですね。ウッド少将の物資係の証  
明書をもってきましたね。兵隊の身につけているのは、ふんどし一  
本だけが私物で、あとは官の物だという姿勢でした。

日本軍の方がつくってあった軍資材の民への配給計画をみて、チ  
ェスはけしからんという、やりかえとなりましたね。今の博愛医院  
の所での米軍と日本側との話し合いでしたが、両軍ともいい合いを  
していましたね。

日本軍が引き揚げるとき、アメリカが、棧橋で時計をとりあげる  
風景もありましたよ。そのようなことで、おかれて台湾にまいりま  
した。妻はマリアで台湾の地でなくなりました。子どもたちをつ  
れに行ったわけです。それで、疎開民引き揚げの栄丸避難の現場を  
目撃することになったんですね。ハゲタカがやってきて、浜にうち  
あげられた遺体の上を舞っている姿は悲惨でした。

この避難のとき、疎開民のために、米、醬油などの食糧を放出し  
てくれた経理の佐藤少尉のことは今でも忘れられません。

#### 軍とのトラブル

平良町西原部落（当時兵事係） 仲間 雅 弘（三八歳）

午前中は竹槍訓練をしたわけですが、午後二時頃、津田副官が突  
如命令を下し、町内会長、部落会長、兵事関係の者を禁足しまし  
ました。

「命令。別命あるまでここから出ることを禁ず。」といました。  
そして、自分はさっさと帰っていったんですね。

それと代って、准尉や曹長などがやってきて、「兵事課はきなき  
い」というのです。

松川主任と私、下地さんに宮川政次郎さんの四人が前に出ていき  
ました。

質問が、兵事主任にとんできました。

「何番地の某は、きょうの召集に応じてきている。それなのに兵  
事課の名簿にはない。」

「兵事課の名簿はいい加減じゃないか。」とききました。それに対  
して、松川主任は答えます。

「第二国民兵までが兵事課の名簿にはありますよ。徴兵検査で丁  
種やば種だったものはない。某は丁種だったんです。」

ところが、むこうはききません。

「某は立派な体をしているではないか。」と反撃します。  
「あなたは徴兵検査の頃の某をご存知ですか。今は立派な体になっ  
ているんだが、徴兵検査の判定は丁種です。」

兵事主任は一步もゆずりません。

こんどは、手をかえてきます。

「某は兵事課の名簿にあるが、いないではないか。」  
「某は今、どこそこにいる。」

「一々やる。その一つ一つに兵事主任は答えて勝った。そうしていると、役場から電話がかかって、兵事主任はすぐかえれ、ということ、松川さんは帰された。」

「かわつて下地さんが応対する番になる。ところが当の下地さんが「弘雅さん、あんたがやってくれ」という頼みをするので、私が代つて坐った。」

最初の攻撃は安谷屋という兄弟についてであった。

「兵事課の名簿には、安谷屋何と安谷屋某の二人があるが、これはまちがいで、一人の人間を二か所にかいてある。」とでてきた。

私はそれに対し、「いや、これは兄弟だ」といいはった。町内会長も、事実をいつてくれて、私が勝った。

そういうことでは勝負はないとみたのでしよう。とうとう本命の問題を出してきました。

「それではきくが、豊部隊長命の動員令をあれだけ返したのは何故か。」と。

「兵事に関係のないものををつつかえしただけです。」と答えると、いつの間にかやってきていた少尉が、刀をガンと音をたてて立て、「貴様らは、満四十五歳までの男子は、全て兵役に服する義務があるということを知らんのか。」と、どなりました。

そのとき、今でも不思議に思う位、すらすらと、私の口をついてた言葉を、いつてやりました。

「皆さんは、充員召集令状規定第三十五条から、第三十九条まで読んできなさい。籍のないものは出せないんです。」

第一線の衛兵司官が現地召集をやる場合の規定なんです、

それからあと、こんどは、兵隊が部落内に入り、ある処女のうちに入ったんですね。それを、部落（西原）の青年たちがきき、そのうちを包囲したんです。そして、口々に叫びました。お前らは女たらしにここまでできたか。戦陣訓を読んではるか、と。

その兵隊はにげだしましたが、青年たちは兵隊たちが駐屯している国民学校にいき、学校の周りに立って待っていました。

その姿に気づいた、ナツカ曹長が、怒って、「軍を監視するの、承知しないぞ」と叫びました。

校長住宅は学校敷地内の部落に一番近い所にあったが、この騒ぎに、住宅からでてきた天久先生は、事情をきいて、「それは君の部下が悪いではないか。」とたしなめたわけです。夜半の事です。

天久先生は、白は清純だというお考えから、御真影を運ぶとき白い風呂敷で包んだそうですね。処が、その事も、軍がスパイよばわりする因だったんだそうですね。白は不吉だということ。

このようなトラブル等があったため、練成隊の隊長は考えたんですね。木村大尉という隊長は、軍民は一体ということで、自分の事務所が、部落内の浜川家にあつたので、そこへ部落の有志を集め、軍の材料（飲食物）を出して懇談会を催しました。

これを機会に、この練成隊と部落民は仲よくなり、翌月は、民の方で軍の幹部を招くという次第となりました。

この練成隊というのは病み上がり兵の部隊でしたが、引揚げるまで仲よかったのです。

ところが、碧部隊の方はそうではなかった。碧がきたとき、最初にやったことは、真昼間、部落に入りこんで、雨戸などをひきはが

これを口に出すと、かんだんに、相手はだまっしてしまいました。追いうちをかけるように、「兵事課に籍のないものを召集するといふんなら、戸籍課がくわいでしょうから、向うにまわせばいいでしょう。」といつてやりました。

沖繩の離島だからどんなことをしているか解らない。そういう不信感があったんですね。しかし、このトラブルで、兵事課がうそをついていないことが判然して、それから、軍の兵事課に対する信頼の度は増しましたがね。

それ以来、この種のトラブルは起こりませんでした。これは昭和二十年、空襲がはげしくなったときの話です。

碧部隊というのは伊良部にいたんですね。ひどいことをやっているということは伊良部からの報告でわかっていました。

それが、二十年の六月にクそのりくに移動して集結しました。そして、この辺（西原）の人々を伊良部扱いにしようとしたんですね。だが、そうはさせませんでした。この辺の人は元気があるでしょう。

元気があるといえば、西辺の校長をしていた天久先生ですね。碧部隊のくる前ですが。

その天久校長はスパイだと、軍がいうていたんですね。その根拠というのはこうですよ。

軍が学校にやってきたとき、何の前ぶれもなかったんですね。そして、勝手に校内に入って勝手に坐っていたんですね。

学校長として、軍の勝手にすべきかと、しかりつけたわけです。

したことでした。

有無をいわさず雨戸をひきはがすのをみておばさんたちは木村隊長に報告しました。木村隊長は練成隊にいつて下士官を動員し、部落の出入り口で、略奪を阻止しました。雨戸を三十数枚も取り返したんですね。

そういうわけで、同じ軍ですが、練成隊には信頼が集まったんですね。碧部隊は、その部隊長が駐屯していた部落の一部を除いては、最後まで人気は悪かったんですね。

碧部隊というのは旅団（独立混成第五十九旅団）でしょう。それが、急に移動を命ぜられて急にきたわけですから困ったでしょう。兵舎も衛兵所も作りたい。食糧も得たい、というわけです。

ここ西原はそれまで山上隊の管かつてして、野菜なども、ヤマガミ隊に供出していました。それが続けられる上に、碧が割りこんできて、無理に押しつけてくることになる、いくらおとなしい部落の幹部も、それを受付けるわけにはいかない。そういうことで衝突もたえなかったわけです。

三名ぐらいいは部落民になぐられたわけですね。そういうことで、碧部隊は最後まで人気は悪かったんですね。

#### 仲間弘雅日誌

平良町の西原部落の有志であり、兵事係でもあった仲間さんは、空爆下のメモをもっております。けい紙に書きこまれたそのメモを原文のまま、全文転載しました。

メモは二つの綴からできています。文中の◇印で分かれており、◇から後半の部分は、ヤマスマミという野草の実の汁で書かれています。インクがなかったということです。

### 備忘録

昭和十九年九月十四日台湾疎開ノ為〇〇戸人員九十六名(男女)出発、他町内会、部落会ノ疎開者ト共ニ出発ス。幹部ノ疎開ニ関シ関心無之為曖昧者が多く随ツテ疎開者少ナシ情況〇〇ノ為延期シ十六日出発ス

十月十日

〇七時三十分初メテ空襲ヲ受ク、敵グラマンキ十数機主トシテ輸送船団ニ襲撃セリ(一隻撃沈、数隻大破炎上)

昭和二十年一月三日

敵ノグラマンキ四機来襲シ内一機宮内海岸ニ墜落漁民ニ捕虜サル

一月八日

午前八時五十分米機B29一キ来襲セルモ偵察シ東方ニ遁走ス

一月九日

午前八時頃敵十二機来襲ス海軍飛行場ニ爆弾投下セリ

一月二十一日

午前九時ヨリ十二時十五分迄米グラマン機延二十機来襲十九時ヨリ夜ヲ利用シテ初夜間空襲海軍飛行場附近ニ爆弾投下シテ遁走ス

一月二十二日

午前九時ヨリ十六時三十分迄三回ニ渡リ延機数二〇キ米グラマンキ来襲セリ

災ヲ生ゼシメ全町ノ約半分ノ被害ヲ蒙レリ、此ノ日黒煙蒙々ト天ニ沖シ人心恐々タリ

四月十二日

久方振りニ敵機ノ来襲ナク民心称々落付ケリ

四月十三日

十五時三十分頃広瀬尾岬近海ニ於テ漁撈中禁南善(五十九才)ロケット弾及銃爆撃ヲ受ケ死亡ス

五月十三日

機銃掃射ニ依リ大浜マツ茅葺焼失ス尚外ニ前泊栄盛宅ハ消シ止メ大事ニ至ラズ三〇〇仲間金角(孫娘)二人負傷ヲナス五月十五日十八時頃三五〇番地禁南金助(五十六才)自宅ニ於テ機銃掃射ヲ受ケ即死更ニ三九六番地真喜屋加根ハ右腕ヲ狙撃サレ切断サル

五月十七日

十五時頃機銃掃射ニ依リ二七六番地仲宗根蒲(七十三才)即死

五月二十四日〇曜日晴天

十五時三十分頃東方ヨリ七機編隊ニテ襲来爆弾四発投下第一弾ハ四二〇番地花城隆盛ノ家宅ノ直グ後第二発ハ三三七番地石嶺金市ノ門前第三発ハ同人ノ庭前へ第四発ハ同番地ノ前泊秋太郎ノ台所ニ直撃ヲ喰ハシテ脱去セリ被害ハ花城隆盛宅、瓦葺一棟、警防団詰所、比嘉伍助ノ馬小屋瓦葺二階建(半倒壊)池田長政ノ本宅一棟、仲間弘雅ノ本宅、各々軽微ナル被害ト前泊秋太郎本宅一棟(半倒壊)を蒙ムツタノミニテ人畜ノ被害ナシ

五月二十七日

十六時〇分頃主トシテ部落ノ北部一帯ヲ西上空ヨリ(四機)機銃

二月六日

〇九、三〇分B29一キ来襲セリ

二月二十三日

一〇時頃池間島灯台附近ニ爆弾投下及機銃掃射ヲナス

三月一日

〇七、三〇分頃二機来襲、一六時、凡ソ四十機来襲シ輸送船二隻爆沈サル

三月二十四日

午前七時三十分ヨリ敵艦載キ終日來襲セリ

四月一日

早朝ヨリ五回ニ亙リ来襲セリ

四月三日

始メテノ大空襲、空爆ヲ蒙ル、町内ハ元ヨリ、当部落内ニモ東支部四五二番地ノアキ屋敷ニ時限爆弾落下西支部五四番地高良蒲氏の南アキ屋敷ニ投下サレシモ人畜ニ被害ナシ(十五時三十分)長崎宗次郎、長崎金三郎宅ニ相当ノ(半倒壊)ノ被害アリ二五〇軒爆弾ナリシモ部落民ハバク弾の威力を始メテ味ハエリ而一十九時三十分頃時限爆弾破裂シタルモ被害全クナシ延機数二〇〇キ内外ナリ

四月八日

終日大空襲延三〇〇キ内外ニシテ敵ノ空襲猛烈化シテ来タ

野原正雄、花城太郎、二軒エイ光弾ニ依ツテ焼却シタ

尚同日兵隊一名機銃ニ依リ貫通銃創ニ依リ死亡ス(盛島金二郎宅)

四月九日

十二時頃ヨリ平良町内ヲ爆撃シ更ニ焼夷弾ヲ以テ悲惨極マル大火

掃射ヲナシ仲間御嶽ノ森ニ繋ギアル馬、四五〇番地仲間次郎所有ノ小馬ニ貫通銃創ヲ負ハシメタリ

六月四日

十五時〇分頃敵キ〇機襲来シ爆弾(二五〇疋)一発ヲ三〇番地前泊金浦本宅庭前ニ投下シ同家屋一棟ヲ押潰シ猶同破片に依ル損害ヲ蒙レル家屋若干アリ。大田蒲、仲間勇勝、高良恵正、友利芳雄、赤嶺長太郎、各本家ハ使用不能若クハ相当被害アリ

六月九日〇曜日〇天

十六時三十分頃敵三十六キ来襲一部(三キ)北支部長崎計助宅附近及仲間与之助ノ庭ニ機銃掃射ヲセルモ被害全クナシ

六月二十五日〇曜日晴天

二十三時三〇分頃敵ノ上陸ノ恐れアリトナシ防衛隊ノ集結ヲナス(三月廿九日以来第三回目ナリ)

◇

五月二十二日火曜日雨天

防衛隊訓練日ニ付本部(山上隊)ニ出頭更ニ病人欠席者ヲ調査ス督勵ヲナス

尚現金回収督勵ヲナス

五月二十三日水曜日雨曇天

現金回収督勵ヲナス

五月二十四日木曜日晴

特命令状交付ノ為西原ニ出張ス

五月二十五日金曜日大雨天

大浦、西原最寄ニ特命令状交付ノ為出張西原現金回収(第一次)ヲ  
ナス約六万円也

五月廿六日土曜日雨曇天

臨時防衛隊出場〇〇水際隊作業援助

五月二十七日日曜日雨曇天

海軍記念日、防衛隊出場日(臨時)役場ニ出頭中、十数キノ敵キ  
襲来ニ逢フ(ソノリ峯附近)

五月二十八日

月曜日晴天雅記

怪蝸蛤天ニあまがけりて地は砕け硝煙は天に沖して万つばむ  
遠近にこだます人穴に入り神機の至るを待つ皇土の南端宮古島

切齒躍腕幾星霜

吾れに百戦必勝を誇る斗魂の士ここにありかつては日露の戦ひに五  
勇士を産み更に殊勲を誇る勇士限りなし

嗚呼武の国宮古島、弘雅

八月七日

時限爆弾ニ依り海軍飛行場北側ノ高地俗称〇〇附近道路上ニ於テ馬  
車ニテ運搬途中十三時頃大音響ト共ニ爆発シ仲間武夫、本村恵規、  
楚南加那志(鬼虎)三人爆死ス

八月十日

一〇時頃漁労中マル附近ニ於テヲカシヲスイジリ爆発シ負傷シ数日  
後ニ至リ死亡ス四二一番地親泊加根一生ノ幕ヲ閉ズ

八月十五日

阿部隊ノ矢端利夫ト一兵幸ノ葉、小豆盛ミ中南支部ニ捕ヘラレテ  
隊長ニ付キ出サル盗難事件ハ類繁ニ出沒シ不安ナリ甘藷ハ無ク米一  
斤三五四トハ実ニ社会問題ノ一ツ

九月二十二日土曜

北支部ノ十九日監視番全員福永隊長ノ命トシテ小松少尉外下士官二  
名呼出ニ来リタリ依ツテ部落会長以下数名福永隊長ニ出頭セリ  
種々隊長福永少佐怒詔ニ依ル話ヲ耳痛ク聞キモシ道理モ非道理モ交  
交ダト思ツタ

概略的ニ言ハバ少佐殿ニハ筋道ガアリ隊長トシテ最モダト思ヒ初対  
面ノ時モ第三者ノ立場カラ聴キスル隊長ノ意志ガ兵ニ徹セズシテホ  
ル事ヲ覚エタ語終テ營倉カラ出テ来タト云フ件ノ兵隊ノ二人ヲ皆ニ  
託ビセシメテ帰ス後部落会長ト二人シテ種々ノ面ニ涉ツテ部落民ノ  
意志及被害ノ状況ト監視ノ意味を申上ケ懇談シテ引トル  
十五夜ダト云フノニ糞泥問題テ斯クノ如キカト思フノニ之ハ又意外  
青年等漁労中二名爆死三名負傷者ヲ出シ人々を驚カシタ  
青年団ニ於テハ(男女)十五夜を利用して娯楽演芸会開催シタ

十月七日

疎開者引揚ゲノ為台湾ニ出発セリ

こき使われいゝんな物をみた役場吏員

平良町下里 砂川 朝重 (二八歳)

V8の運転手として

果然停戦ノ詔書換発ノ報ニ接セリ

九月一日

兵事課書類始末ヲナス

九月三日

野原越ニ所用ノ為行ク仔馬ヲ買入レタ

九月七日

幹部会ノ予定ナリシモ十日ニ延期セリ

九月十日

松川英一宅ニ行ク、下地、宮川、四人シテ久振りニテ一杯ヤツタ

米国人ガ始メテ宮古ニ足ヲ入ルトノ報アリ(十八名)居所測候所ナ  
リ

九月十二日

役場ニ行キ町長初メ吏員一同ニ挨拶ヲナス

九月十八日

増産ノ為美里原ニ芋植エ準備地全部約一段植付完了ス

九月十九日

部落全地区ニ農作物及盗難事件頻発ニ伴ヒ監視ヲ交代ニテナス

九月二十一日

監視中碧、福永隊長ノ兵隊ヲ東支部ト北支部ノ両支部ニヨリ其レゾレ  
引捕ヘテツキ出ス

九月二十日

西支部兵隊盗ミ手捕ヘテ玉木隊長ニ突キ出ス不思ギニ民ガ引カカ  
ラズ兵バカリ引カカルノハ不思議中ノ一ツ

九月二十一日

昭和二十年に入ってからのことでしたか、そのときはもう、警防  
団も消防隊も一つになっていましたよ。私は、当時宮古にあったた  
だ一台の消防自動車V型八汽筒のフォード(略称V8)の運転士を  
していました。

朝鮮船員の乗っている油槽船が瀬水の港(平良港)でもえだした  
というので、出動しました。七一四(第二〇五飛行場大隊は、球七  
一四部隊と称していた)の舟艇に消防車をつみこんで消火に当たり  
ました。そうしているうちに、池間島の方からグラマンがっこん  
できました。船員の大部分は上陸していましたが、油槽船の方は逃  
げ出して、一番高層といわれた第一棧橋と第二棧橋の中間にあたる  
岸にくっつきました。私たちも上陸しました。そこで、池間の沖で  
大きな船が水柱を高くあげて沈没するのを見ました。あれが豊坂丸  
でしたでしょうか。第一棧橋の処につながれていた海軍の警備艇の  
方は、佐良浜めがけて逃げ出しました。飛行機が追って行って沈め  
てしまいました。

私たちが消火に当った船は、無事鎮火はしたが、もう使いもの  
になりませんでしたよ。ところが、そのままにしておくと、空襲の度  
毎にこの船がねらわれるというので、平良から離れた大浦湾の方に  
もっていきましたね。戦後も、赤錆びた船体をぶざまに海面にさら  
していた船ですよ。大建丸ですかね、あれが。何回も何回も銃撃を  
くらったはずですよ。

消防隊は、それはもう決死の作業でしたね。四月になってからの  
ことですか、平良市街の北部に当る荷川取や西仲宗根が焼けた日の

ことが思い起こされます。

敵岡という鉄工場の付近がもえだしたので、石田警防団長を先頭に出勤しましたね。ものすごい焼夷弾攻撃です。夕方から始められましたね。真玉御嶽というお宮のある海岸に戦車のキャタピラが積まれてあったのがねらわれたんですね。かけつけたときは、あたりは一面火の海です。

うね岡鉄工所の東側に近く、消防用水の水タンクがあったので、その水で消火に当たっていましたね。すると、また空襲です。今度は機銃掃射です。バラバラやりだすと、みんな逃げだしました。

私も、消防車の下に身をかくしていました。車の下におって、アケセルを引っぱり、エンジンをいっばいふかしていました。筒先をもった人は、一人で頑張っていました。しかし小さな水タンクです。水もすくなくなり、もう誰もいなくなりました。はげしい空襲のさ中、兵隊たちが、たんかをもつて、南の方へ、何人もの人を運んでいくのを見ました。あたりは一面、煙がまいてくっていました。

危険が刻々せまるのを感じましたから、ホースをはずしましたね。一人ではまくことも出来せんからね。車だけを運転して、そこから二百メートルとは離れていない外間お嶽の木の下に移動しました。そして、警察署にあった本部に帰って報告しました。そうです、ホースはあとでひろってききましたが、それが消防車出動の最後となりましたね。

野村さんのやっていた新世界という映画館の正面に爆弾がおちたときは、仲村警部補と警察のやぐらの上にはいました。物すごい黒煙になっていました。私服の国民服に二つ星の階級章をつけていました。作業ばかりで横穴ほりをさせられましたから、鉄砲など支給されませんでした。

防衛隊にも何回か召集されました。当間隊などちがって、これは一日かぎりの訓練ですね。盛加の南の嶺のすその広場に、何日に出てこいという令状でやってくるわけです。

隊長は少尉で村山とかいう人でしたね。ここでは竹槍訓練がおもでした。それに個人壕（たこつぼ）も掘られました。個人壕に入っている訓練もありました。

個人壕に入っている訓練は奇妙なものでした。敵の戦車がすぐそばにきたとき、身をのり出してハンマーで爆雷をたたいて爆発させ、さっと、壕の中にひっこむというものです。爆雷の実物ではもちろんなく、もけいのような代用品を使ったわけです。爆雷は豊式日光砲というもんだときいたんですがね。

その形もないものを、ハンマーもないんですから、ハンマーをにぎっているかっこうをつくって、たたくまねをしたというわけですね。

実際にはどうなったか知りませんがね、たたいて、すばやく壕にもぐれば、戦車はこわれ、自分の生命の方は助かるものと信じていましたよ。

豊式日光砲というのはすごいものだったんでしょうね。貯蓄奨励に担当の細竹部落に行く途中、空襲があつたね、街の東のはずれ、東川根の洞穴に身をひそめたのですが、ものすごい音が飛行場の方向でしたので、その方をみると、煙がどっと上がっていましたね。

があがり出したので、さては、うめてあるというフィルムがもえだしたな、とわかったので、かけていってみました。ひとのたけよりも深い大穴ができており、建物はずれていました。そのとき、ひとのうめき声をききました。木のきれなどをとりのけて声の方をみると、頭の皮をはがれた瀕死の状態の源河さんです。隣の店の主人ですが、大きな建物が安全だと、そこに避難したのでしょいか、柱の下にはさまれていました。これは大変だと、四、五十メートル先の大見謝支店にいて、前に話した油槽船の乗組員だった朝鮮の人たちをよんできて一緒に救出しました。しかし源河さんは亡くなつたんですね。朝鮮の方たちの応援で爆撃跡は一応整理しました。

#### 防衛召集

野村酒屋など街の中心部（西里大通り）が焼かれたときは、当間隊（郷土部隊の特設警備第二〇九中隊）に召集されましたが、街がやかれたので、逃げてきてみましたね。私の外にも多勢いきました。そこらはすっかり焼けていました。もろみおきの西側に、野村の婆さんがうずくまって生きのびていました。そこに中飛行場の郷土部隊（特設工兵第五〇五大隊）にいて野村安正さんもきていたが、酒をのんで、気狂いのまねをしていましたね。「朝重、ごらん。何もかも終りだよ。君も酒をのめ」と、涙声でわめいていましたね。

当間隊には永らくはいませんでしたがね、毎日が壕掘りでしたね。訓練なんてものはありません。徴兵検査で第二乙でした私は、昭和十五年から十六年にかけて、北支の飯田部隊で輜重隊の一等兵をききましたよ。

そのあと、海軍飛行場と中飛行場の間にある地盛の方に行きましたが、飛行機のかげらがいっばいちらかっていましたね。二機か三機を一度にふっとばしたようですね。そのとき、日光砲だという話をききましたよ。

#### 空襲下の貯蓄奨励

私は、消防の外に、役場の戸籍係も兼ねていました。空襲がはげしくなると、役場は東川根の友利玄繁さんの所に移っていました。家族はみな台湾にそ開きせてありましたので、よく役場でねとまりしました。郷土部隊に行っているときを除いたら、ずっとそこでした。

私の主な仕事は、召集令状を町の北部方面に配達すること、貯蓄奨励に出かけることでした。

仮役場も安全ではなかったんですね。爆弾二発が落ちてきましたよ。玄関先と、少しはなれた処でした。私たちは、庭の防空壕の中にかくれていましたが、その中にも土の雨が降りました。危ない、ということ、戸籍や兵事課の書類は、添道部落の壕の中に移しました。

軍の経理部から、貯蓄奨励に行つてこいというてきました。空襲の中を、しょっちゅう行け行くと、督促するものだから、ブービー不満です。その日も亦、空襲でした。仮役場の裏の畑で芋植えている親娘がいましたので、みんなで壕にはいれとすすめました。ところがきき入れてもらえません。宮古神社の神主の本永さんです。「私は神の人だから弾丸はこないよ」といつてとりあいません。仕

方がないので、自分らは壕の中にかくれました。空襲はボンボン始まりました。突然、女の子の悲鳴がきこえました。出ていってみると、本永さんは頭蓋がまくれていました。友軍の高射砲の破片でやられたようで、即死でした。

空襲下でも、貯蓄奨励を強制するのは、わけがあったんですね。兵隊に月給をはらうためには、現金が必要だったんですね。補給は断たれているのですから、島内にある金をまわさないとならなかったわけです。私の担当は細竹の部落でした。行っても、それはなかなか人に会えるものではなかったんですね。

これは戦後の話なんです。平良の街の東のニヤーツの近くには海軍の吉丸隊では、下士官が何名も、兵隊たちにしげみの中でなぐられていることをニヤーツの義妹からきましたよ。兵隊の不満は、いつでも爆発するおそれがあったんですね。だから、月給やらんといかん、そのために貯蓄奨励をやらされたわけですね。

話はずっと戻りますが、貯蓄奨励して細竹から帰るとき、二重越の手前にさしかかったとき、至近弾をあびたが、奇跡的に助かりましたね。丁度五本松のある処で、そのかげで破片をさけることができました。

いのちびろいして、ニヤーツ部落にくると、吉丸隊の兵舎では、馬肉のごちそうをしていました。空襲でやられた民の馬をくついているということでした。凹地にあった軍属の兵舎が機銃掃射をあび、人も死んだということでしたがね。

平良の街にいたのは夜の八時頃にはなっていましたよ。か、またも空襲です。私がかくれていた近くの墓地に直撃があり、伊舎堂

き、そのかげに若婦人のうすくまった死体がありました。空襲がきたので、墓をもつかむ気持で、そこに難をさけたつもりだったのでしょう。重箱にもちをいっばいつめたのを胸にだいたまま冷たくなっていました。

知り合いの山内の婆さんでした。朝の空襲でやられて、誰にも知られず、死んでいったのでしょう。さっそく、留守宅に報せました。

平良の街で直撃をうけて死んだ兼島家の女の人を、実家のある地盛の墓に葬ったのだが、その人の初七日にあたるというので、もちをそなえに行く途中に、不幸にあったのでした。

七一四部隊というのは、宮古に一番はやくやってきた飛行場部隊（第二〇五飛行場大隊で、通称、球七一四部隊）ですが、その隊長はヒゲ部隊長といわれていた吉岡軍一郎ですね。この人は、私のうちの南隣の土地倅吉さんの処で、ときどき酒をのんでいましたよ。

終戦も近づいた頃でしたかね。私のうちの付近は戦禍をまぬがれていました。その日は私はうちに帰っていましたがね、ヒゲの隊長と、倅吉さん、それに医者の高原恵典さんの三人が酒をのんでいましたね。そうした処へ、防衛隊の村山とかいう少尉がやってきましたね、私のうちの西隣りを間借している下地淳一さんの処で、高原さんとこの運転手をしている仲宗根さんの行方をたずねていたんですね。仲宗根さんが防衛召集に応じない、つまり隊にきていないので、探しにきたというわけなんです。

それを伝えきいたんですね、高原さんは。おこって、自分の医院

さん夫婦がやられましたね。

貯蓄奨励もいのがけでした。

#### 七一四部隊

軍が何かをたのみに、役場にやってくるときは、いつも少尉あたりを長としてやってきましたよ。

私が七一四部隊に連れていかれた日も、いつものように朝の十時頃に空襲がありました。空襲がすんだので、少尉の車にのせられて、七一四部隊の本部に向いました。私の技術を見込んでのお供です。得意の絶頂でした。

七一四部隊の本部は、海軍飛行場と中飛行場の中間ほどのところにある山中部落のマクヅクという処に当時はありました。そこに、戦利品でしょうか、フォードのV型の自動車は二台ありました。町の消防車と同じ型なので、私に修理を頼んだという次第だったので。

そのときは、ひどい奴らだと思いましたね。その頃は、私たちは、モグサの葉などをほした紙にまいたタバコの代用品を吸っているのです。私には修理をさせながら、自分らはほんもののタバコをスパスパやっているのです。一本さえ吸わそうとしないのです。

それだけではありません。四時頃に、修理を終えて帰る段になったわけですが、お礼はただ一つ、「ごくろう」という言葉だけでした。車も出してくれません。歩いて、独りで帰りました。

出来るだけ近道を通ろうというので、飛行場のすぐそばを通りました。敵をあざむくために作った木製の偽装飛行機の側にきたと

の車庫の処で、口論になりました。酔っていた高原さんは、少尉の耳にかみつきました。少尉がスゴスゴとかえっていく姿を私は見ました。

その晩、私は、台湾に疎開でいっている家族のところへ、島をぬけて行く決心をしました。七一四部隊は、大発という舟艇をもっていますね、これが空襲下でも八重山と往來しており、台湾まで行っていたんです。私の北隣の人は、台湾からその船でかえってきたんですが、ゴールデンバットというタバコを大量にもってきて大もうけしていたんですね。その大発が、翌朝台湾むけ出発するというのです。そう酒座で話しているのを耳にしたんです。私も便乗を頼みこんだんです。

翌朝は、未明に起きました。早速倅吉さんの処へ行きますと、なんとぬけのからなのです。その晩のうちに、大発は出発してしまっただけです。倅吉さんはその船にのっていったんです。人間、何が幸か不幸かわからないものですね。戦後、さかえ丸遭難の際、倅吉さんは不帰の客となってしまっただけです。

#### 憲兵伍長

こんな話をしてもいいんでしょうかね。

那覇無尽というのがありますが、その西隣の与儀さんのうちは、爆弾でふっとびましたね。一家全滅でしたよ。すぐ隣の比嘉商店のコンクリートの壁は、血でそまっています。

そういうことがあって、那覇無尽にいた憲兵隊は、私のうちから西へ五〇メートルとは離れていない平良さんの処へ移っています。



た。憲兵たちは分散して任んでいたようですが、そのうちの一人である伍長が、私のうちに住んでいました。

七月の初め頃でしたでしょうか。うちにかえってきた私に、今夜はねむれそうにないから、酒を買ってこいというのですね。仕方がないので、当閣隊にいる頃知り合った増原部落の人のうちまで買いに夜道をいきました。キビ汁で作った密造酒を買ってきたのみでしたがね。その憲兵は、中飛行場で不発弾処理をさせていた米軍の飛行兵の捕りよをピストルで撃ってきたという話をしていました。

捕りよといえ、久松の部落の中にも、アメリカの飛行兵が降りたんですね。それがある警部補がやろうとして、みんなにとめられたということもあったそうですね。

### 朝鮮人慰安婦の遭難

平良町西里 池村恒正(三一歳)

昭和十八年、平良市西里で歯科医院を開業していました。当時は篠原、西村、高嶺、それに私の四か所がありました。戦争が次第に悪化の一途をたどる中で他府県から来て開業していた篠原、西村氏は各々郷里へ引き揚げて行きました。十九年、いよいよ、宮古も戦争にまきこまれると云う事で私も家内を島根県へ疎開させました。身重の体で、子供二人をつれ、家族別れをして、妻は旅立ち母と私と妹三人で宮古に残る事になりました。家族別れの生活は不本意だし私も一緒に行きかけたのですが、軍部はそれを認めません

入れると入れさせました。私と嵩原氏の二人だけを乗船させ、三日後、無事台北に着きました。台北駅前にあった医学部分室で話をつけ、台南の陸軍病院から担架と薬品類がとけられました。

キールン港から曉部隊が別の船を仕立てる事になり、私はその間に宮古から来ている疎開者のいる所をたずねたり、物資の買入れをしました。宮古への船がある事を知り、当時の伊良部村長の友利カツ、城辺村長の友利正春、下地村長の下地恵知氏が乗船し、朝鮮人の慰安婦五十三名を乗船させ、キールン港を出港しました。軍人二人が、その慰安婦たちについて来ました。キールン港を出て、午前の四時頃シャリウ町の棧橋の沖合一海里くらいにさしかかった時、同乗した村長三人が船長室のキャビンに集まり、昨夜の夢見が悪く、船がぼんぼんやられる夢を見た。その棧橋に船をつけておろして呉れる様、交渉してくれと云うのです。船長にその旨告げると、軍命令で動かしている船を、予定にない勝手な場所につけるわけには行かん、強いておるならそこからおりて泳げと云うのです。棧橋から百メートルくらい沖を通り始めました。伊良部の村長をのぞけば五十歳すぎの人たちがとびこんで泳いで行きました。結局、民間人は私と慰安婦たちが残りました。

翌日の夜明け前に与那国に着きました。そこには船をつける岸壁がないから、霧が晴れてから入港しようと、港外に船を止めました。

夜が明けそめる頃、北の方から飛行機が一機来ました。アメリカの飛行機なら編隊を組んで来るし、こんな小さな機帆船でも日本軍は守ってくれるんだ、ありがたいものだ、甲板に出て、朝の空気が

でした。

十九年末ごろ、町の大半が空襲で焼失しましたが、西里東部にあった私の診療所が焼け残りました。

そこを軍医部が集会所として接收したのです。軍医部の脇田大佐と知り合い、その情実で、召集からはまぬがれました。「本来なら君も行くべきだが、それを免ずるから、台湾に行つて来い」と云うのです。鏡原小学校にある陸軍病院にマリリア患者があふれ、その患者達を移動させるに担架が必要だが足りない。医薬品も欠乏している。台北帝大の医学部の分室まで行きその不足している物資をとって来るように云われました。

曉部隊と呼んでいた船舶隊の川辺中佐にかけ合い小型の機帆船が用意されました。当時、町会議員をしていた嵩原重夫が、疎開している町民の視察と云う名目で同乗する事を申し込んで来ました。船が出る事を知って織物組合長をしていた座間味朝幸氏がたずねて来ました。宮古には生活物資が払底しているし、ついでに何か買つて来た方がよいと云うのです。織物組合の金を使って呉れないかと当時の金で五万円、寝耳に水です。好きな様に使つて、タバコ、紙類を買つて来て呉れと云うのです。どんな世の中になるかも知れんから二万円だけあずかろう、そうでないとなあなたの身のあかしが立たん。但し、ひんびんと船が沈没させられているし、二万円あずかっても、それだけの品物をあなたにとどけると云う確実な約束は出来かねる。ここはいちかばちか、あなたは二万円出す。私は命がけで行く。事の成功、不成功は問わぬと云う一札を入れろと云いました。それはその通りだと云う事でしたが、言葉だけでなく必ず一札

を良い気持で吸っていました。慰安婦たちはハンカチを振って飛行機を見ていました。北西の方向に来ると、日本の飛行機ではない、急降下してくるのです。くもの子を散らす様に甲板に散って船底にもぐったのです。いつでも日本軍が守ると云う事だったしそれを過信していました。最初の銃撃で十数名慰安婦たちがたおれました。甲板の上には逃げおくれた女の人たちがなきわめいているのです。第一波の攻撃がすんだかと思うとくりかえしおそいかかって来るのです。どうしたら命が助かるかと水タンクに腰をおしつけてふるえている私の右側に二人、左側には一人、朝鮮の女性がふるえて見動きできないでいるのです。三回目の銃撃の時、ロケット発射と同時に破片らしきものが私の上衣のボタンを砕き左手にいた女性の胸部を貫くのです。ふりむく間もないあつと云う間の出来事で、ほとんど即死です。発射されたロケット弾が、機関部に命中したらしく、黒煙が上りました。それでも飛行機は去りません。このまま船上にいては、船もろとも沈められてしまうと、甲板をかけ出しました。慰安婦たちについて来たシモワキと云う曹長が血まみれになり甲板にころがっていました。肩からかけていた革袋のカバンを頼むと云うのです。それをうけとるなり、海へとびこみました。船はアンカーをおろしていたのでそのロープの方へたどりつき、それにすがりながら飛行機の来る方向から体をかくしました。だれかが先にイカダを海へ落していたらしくそれにすがりつく慰安婦たちが片方だけにすがりついたため、いかがが転覆し、アイゴー、アイゴーと叫びながらおぼれていくのです。六回思いかかったのち攻撃が遠のいたと思えます。すきをねらって岸の方へ泳ぎ出しましたが、だんだん

渡れて来るので寝泳ぎに変えました。何か足にふれました。足に力を入れて見たら砂地です。体を反転させると足が地につく。ひざくらいの所を必死に泳いでいたのです。助かったと思うと、涙がポロポロこぼれて来ました。

クブラの警防団の人たちが沖の修羅場を見ていた様ですが執拗に攻撃している飛行機を見て、手がつけられないまま、見ているだけだったと云うのです。ふらふらしながら、たどりついた私を見て、まだ生きている者がいると云う事で、救助作業が始まりました。くり舟を出して死んだ人たちを運んで来ました。生き残った朝鮮の女性は七名だけでした。この人たちは好き好んでイアンピーになったわけではない。日本の強権でつれてこられた人たちだったのです。

湾になった港のつけ根の所に小高い砂地の丘があった。五十体程、アダンの枝を集めて火葬し、その丘に骨を埋葬しました。生き残った女性たちから名前をきき三文字の姓名を記し簡単な墓標を立てました。宮里さんと云う漁業組合長が警防団長も兼ねていて、その人が世話役になっていました。

宮崎武之と云う師団長の所へ、曹長から託された革のカバンをどけました。何が入っているかは見ませんでした。師団長は民家の良いかまえの家に住んでいて、しばらく静養して行けと云っていました。生き残った七名の慰安婦をつれて伊良部島に着きました。伊良部青年学校には与那覇春吉氏が校長をしていて、台湾から着いたと云う事を聞いて疎開させていた妻子の消息を聞きに来ていた。アンペラ一枚が、一世帯のスペース。冬の寒さにこたえていた旨、冷

ていたら、そのまま北上して行った。

## 二、郷土防衛の名で軍隊に組み込まれる

特設工兵第五〇五部隊長は何をしたか

平良町下里 下地 恵 二 (三十歳)

宮古には、第二十八師団が進駐してくる昭和十九年の夏以前には、特設警備隊というものが作られており、在郷軍人を召集して訓練しながら作業等をやられていました。

昭和十八年の九月からは、平良市在の海軍飛行場の設営が始まり、十九年の五月からは下地町に陸軍飛行場の建設が始められていました。

下地恵二が臨時召集を受けたのは、昭和十九年の九月一日でした。第二十八師団司令部が、県立宮古高等女学校の校舎を使用して、師団主力の展開を指揮したのは同年の七月なかばからでありますから、それから一か月を過ぎた処で、下地に臨時召集をかけたこととなります。参謀部の動員課につめさせられました。

下地は中岡大陸で長年戦火の下を歩いてきた陸軍中尉です。軍は、この男に、島の男たちを指揮させようと考えたのでしよう。

宮古には、壮丁として現役の兵隊にくみこまれる普通の徴兵の他に、それ以外の者についての召集がありました。

えと栄養失調で宮古へつれて帰ってくれと泣いてする苦勞の様子を若かったせいもあってありのまま話したら、春吉先生はシワプリー(心配のあまり意気消沈)している。奥さんの眼が悪化したのも、あの時の栄養失調が原因していると思う。

伊良部島を経て、着のみ着のまま宮古島に着き、七名の慰安婦を野原越の師団管理部へ連れて行きました。慰安所が今の沖繩食糧公社の西隣、西里、野原越にありました。野原越の管理部は垣花恵栄宅にありました。兵隊の性欲と云うのはそんなに強いものだろうか、連日、列をなして順番を待っていました。担架と薬品をとりに行つて、それははたきず、二万円物の物資は無一物となり、朝鮮の女性七名をつれて帰ったわけです。

二十年五月、もう、町の中は無人化し、城辺村の字友利に疎開しました。農家の馬小屋を借りてそこを診療所になりました。地方に行く程、物資があるのです。白米、糶ずめ類が。将校たちも治療に来るのですが、治療は二の次で、昼間から持参した日本酒を、私の借家で飲んでいました。軍規は乱れていたのです。

五月四日、友利そこばりから、東の海に、黒と灰色の軍艦がズラリと海を庄する様に浮んでる。艦上の人の動きがわかる。いよいよ、最後だと、胃酸カカリを前もって用意していたから、上陸して来たら、これを飲んだら、々きれいになる(薬に死ぬ)からと老母と、妹に一包みずつ渡したし、壕に入れた。いっせいに砲門を開き、頭の上を、すずめが群がる様な音をたてて砲弾が飛んで行く。三十分くらい間断なくその音が続いて、前方の軍艦が、北に動く。平安名崎の方に向いている。そこから、上陸して来るのだと心配し

臨時召集というのがその一つであります。これが所謂召集でありまして、主に将校や下士官がこれを受け、常時軍に籍をおくようになりました。

これに対し、警備召集がありました。警備召集は、必要に応じて短期間、兵役に服するというものであります。

郷土部隊は、既にできていた二つの特設警備中隊であります。第二〇九中隊と第二一〇中隊です。一つは平良町に駐屯し、他は下地村に駐屯するものであります。

軍が駐留することになった頃は、戦雲は急を告げるようになっていました。十・十空襲もありました。しかし、島における戦闘態勢はまだ充分ではありません。陸軍飛行場は完成をみていません。

つるはしとしゃべるでの飛行場づくりです。この完成と整備の急が、下地の召集となり、下地らを中心とする特務部隊の編成でありました。

十一月三日に、総勢八百人に対し、警備召集が行なわれ、下地村野原付近に作られていた陸軍中飛行場の掘立小舎に集結させられました。これが、第五〇五特設工兵大隊とよばれたものであります。

第五〇五大隊は、四つの中隊に編成されました。第一、第二中隊は平良町出身、第三中隊が下地村出身、第四中隊が城辺村出身で充てられました。

この部隊は、大部分が補充兵です。支那事変がえりの老兵と、補充兵、それに兵役免除になっていたものまでも寄せ集めたものでした。銃を全くつかまえたこともない人々が大部分であり、戦争末期に余剰の銃が配布されるまで、実際銃も支給されませんでした。

大隊の任務は、陸軍飛行場（中飛行場）の完成と、その機能維持でありましたから、しょべるが主要武器であったわけでありました。

第五〇五大隊は、玉木少佐を隊長とする飛行場設定隊に編入されました。師団直轄で、本来の飛行場大隊と、輜重隊一個中隊、それに第五〇五部隊の三つが、設定隊でありました。それで、この第五〇五大隊という郷土部隊は、この設定隊の重要な戦力でありましたし、師団からは参謀が飛行場に常駐するようになり、いろいろと干渉も行なわれました。

最初の仕事は、形は、大体できていた飛行場を完成することでした。滑走路ができあがりますと、こんどは、誘導路、掩体づくりが行われました。そうしているうちに、昭和二十年の年があけ、空襲がはげしくなってきました。

空襲は大体昼ありました。爆撃で穴があきます。滑走路の両側にある松林などにねむったりして待機していて、夕方になると、その穴うめにかかりました。

飛行機を押すという作業もありました。誘導路はでこぼこ道ですから、人間が飛行機をおします。

夜の作業が早く終われば早くねむれるわけですが、中々の作業でした。

四個中隊でできた大隊の中で、大隊長下地のもとに常時あったのは二個中隊だけとなりました。一つの中隊は、野戦飛行場設定隊の渡辺大尉の指揮下に入れられましたし、もう一つの中隊は、飛行場南の宮園海岸に派遣されました。

宮園海岸に行った中隊は、敵の上陸を妨害するための障害物敷設

しかれ、一般に緊迫感がでてきたときがあっても、大隊は、海岸線を警備する部隊とは違って、特別な緊張感を持ち得ませんでした。

逆八字型の二本の滑走路の接合する所に、設定隊の本部がありました。その日の昼も、下地は電話で呼び出されました。参謀肩章をつけた少佐が、作業人員のすくないことを難話しました。そのかえり、滑走路を横切って帰る途中、空襲にありました。島の中央にある野原岳の丘のかけから、低空でやってきたグラマンが、いきなりバラバラと機銃をうってきました。

そのとき、下地は最期のときがきたと思いました。それでも必死にかけました。滑走路を横切った処で、ころがるようにちょっとしたかけにとびこみました。銃弾はあたりにつきささりました。ちよつとした岩かけが、下地の生命をすくいました。

夜の作業だけではまにあわなくなったということでした。参謀は、下地に決死隊の編成を命令しました。隊長下地以下五〇名ばかりで決死隊がつくられました。

決死隊は、滑走路のすぐそばの洞穴の中にひそませておきます。隊長は視界のきく個人用のたこつぼの中に一人入って、機を伺います。敵機の空襲が終わった瞬間をねらって、作業開始を命じます。作業中、敵機の来襲は、指名された対空監視哨の合図でわかり、その合図で、サツと退散する。そういう作業でした。

この決死隊作業は、一日だけで、終わりました。他の隊で、犠牲者がでたためでした。

下地隊は終戦までに十七人の戦死者を出しました。十人がマリアアによる病死者でした。マリアアの軽いものは家族のもとにかえ

作業に当たっていました。製糖会社のトロッコの通る鉄のレールを切った棒を組み合わせたものを海岸線に並べて、敵の上陸を妨げようというものでした。

下地のもとには四百人（二個中隊）が残されたかんじようになります。しかし、マリアア等の病人ができましたし、稼動員はどうしてもすくなくります。それに老兵がまじっています。召集され、初めてもらった一つ星の兵隊は、兵であっても、普通の軍隊の新兵とはちがいます。家族の安否を気づかなくて、ぬけだしてうちへ帰るもの、食糧を補給しに自分のうちへこっそりいくもの等々。夜の点呼のあとに、こっそりとでいきます。

これが目立つようになると、夜の作業人員がへり、当然のことながら、未明までにはどうしてもやりとげなければならぬ作業がはかどりません。

下地隊が担当させられていたのは、逆八字型の二つの滑走路のうちの東の一本でした。その整備は至上命令となっていました。作業が進まず、夜明けまでのびると、空襲の危険も待っていました。

戦争の日常の仕事として、この島では、飛行場整備しかないわけですね。それで、参謀たちがしょつちゅうやってきます。作業人数がすくないではないかと、隊長はきびしく注意されます。

兵舎の付近の洞穴が管倉に当てられました。脱走したものはこの中に入れられました。このきびしさの故に、部隊本来の姿を維持出来たと思つて居ります。

戦争中、戦闘の実際に直面していたのは飛行場関係だけでしたから、乙号戦備といつて、敵の上陸必至といふこととする非常事態がしました。何しろ、くすりも食物もないという状態であったからです。

一度にどつと犠牲者を出したのは、添道分遣隊でおこりました。食糧が足りないのです、下士官を長とする自活班を平良の街の北東にある添道部落に派遣して、漁労と大野越の畑作りをさせていました。宿舎にしていた青年会場で炊事をしてるとき、この火めがけて落とされた直撃弾で即死者を出してしまいました。

七月に入ると、空襲は散発的となりました。もうこちらには飛行機はありません。時々連絡機が台湾からくるだけです。それでも空襲があれば穴うめ作業は続きました。

戦争が終りました。飛行場付近で墜落して死んだ米兵をうめた処に、十字架が立てられました。

一週間ほどして、参謀の訓示があり、部隊を解散しました。臨時召集の常置員とよばれた将校下士官はしばらく残務整理のため残されました。飛行場関係は戦犯のおそれがあるということで、命令によって書類一切は焼却されました。

思うに、昭和十九年十一月隊編成以来解散に至るまで第五〇五特設工兵大隊には、一日の休みもありませんでした。

現地入隊者

平良町松原 砂川 金吉（十九歳）

兵とたべもの

「海軍飛行場の建設段階では、私は作業にきました。タイムアップ（賞金かせぎ）に通いました。」

その後、入隊までの一年ほどは、福嶺医院で受付や薬剤調査などをしておりました。

昭和二〇年の三月に、豊五六二〇部隊（歩兵第三連隊）に現役兵として入隊しました。第一期検閲までの三か月間は、地盤というところで初年兵教育を受けました。

大隊に初年兵が九人いました。その中に一人病弱な者がいましたね。兵舎番をさせられていましたが、腹ごしらえにうちへかえったんです。いないということで捜索したらとこと帰ってきましたね。

同年兵の家族が、面会にきて、馬肉をくれました。班長に報告したら、翌朝たべなさいということでしたが、不寝番のとき、つまみぐいをしてしまいました。そうすると、さあたいへんです。一週間は食前食後に軍人勸諭を奉読させられることになりました。

それだけではありません。棒で頭を一回すったたのです。こぶができました。夜ねるとき、枕もできないほどでした。

食べ物のことではたいへんこまりました。食器洗いのとき、残りかすの、粒々のかたまりをとってくださったこともあります。

訓練ははげしいし、食事不足でしたから。

#### 屍と兵隊

夜間作業で飛行場に行ったこともあります。そのとき夜間空襲にも遭いました。古年兵が二人死んだのは、昼の飛行場作業のときで

した。

小隊に配属されない前でしたが、いくべき小隊の方が病死したというので、屍を受領しに鏡原小学校にあった病院に行きました。ところが、先に受領した部隊の人たちが、屍体をとりちがえてもっていった私たちの受領すべきものがありませんでした。そのときは、監視の任にあった伍長も、将校もさかんにわびていましたね。

夜、一期上の長崎松雄さんの留守宅にいったごちそうになり、めあての屍を受領したのは、夜の十一時頃でした。受領してかえるとき、照明弾がぼんぼんあがり、空襲がありました。さっそく、屍を積んだ荷車の下に身をひそめました。

翌朝、火葬する準備をしました。衣類が不足しているというので、靴も衣袴もすっかりとり、屍はむしろにのせて、夕方火葬をしました。火葬をはじめまでの間、番をさせられましたが、上空をカラスがとびかき、それはほんとにいやなものでした。

服は洗濯して、係にあずけました。屍の王は、荷物を調べてわかったことですが、松原一等兵という東京の方でした。

#### 水と兵隊

艦砲射撃のとき、部隊には被害はありませんでしたが、ひそうな気持ちでした。私をも含めて、同年兵は、「たえられそうにない。ひとりで死ぬのはいやだ。皆が集まっている処に、直撃でもおちてくれたらいいのに。」と話し合ったものです。みんなと一緒なら、死ぬのもこわくない、と思っていました。

逃亡兵が、松の木につるさされているのをみました。足は地面につ

かないようにぶら下げられていましたが、上官や隊長などをのろうことを発していました。どうせ死ぬのだ、と思っっているようでした。

同じ中隊の大学出の一等兵でした。ひねくれたような人で、しゃべりたら（除隊したら）中隊長ぐらいいんでもない、と中隊長の目の前で、ふだんからいっていましたがね。中隊長は彼にこことはないかったですよ。

逃げて、留守宅に帰った一期上が重営倉に入れられましたね。

私の場合、六か月の間に、結局二回しかうちにはかえりませんでした。一回は公用外出でしたが、もう一度は、にげて（無断で）三時間位、うちへ行きました。うちにいって、めしを腹いっぱい、いそいで、たべました。罰をうけるのがこわいので、いそいでもどりました。

初年兵教育を終ったあと、そうですね、終戦の一か月前頃になりますか、発熱しました。マラリアの始まりでした。

熱発して、作業は休みました。兵舎にいましたが、ものすごく水がほしくなりました。こっそり水のあるところにいき、ひしゃくでのもうとする処を、他の分隊の分隊長にみつかってしまいました。ひしゃくに水を入れ、それをもって立たされてしまいました。幸いなことに、十分程したら、自分の分隊長がやってきて、私の顔に水をぶっかけ、帰してもらいました。

あとで、立つことを命じた隣の分隊長がやってきて、誰の命で帰ったかと、とがめだてはされましたがね。

マラリアのために、終戦の頃には、髪の毛は、すっかりぬけまし

た。終戦でうちへかえったらこわれていましたがね。栄養がいいものですから、ときどき熱発する程度になりましたよ。

初年兵教育を終わっていった処は、川満部落の北東にあった、旅順港山とよばれていた処でした。そこへ行く前の第一期検閲は、たこつば戦でした。爆薬を戦車にほうりこむ動作ですね。

兵舎のそばに糧まつ倉庫がありましたね。

不寝番のとき、その内部に砂糖（ざらめ）のあることを教えてくれた古年兵と一しょにしびのびとみ、それをたべ、水のみましたね。翌日はすこい下痢です。それをいえない苦しみ、というのもありましたね。終戦になっても、演習はありましたよ。

九月一日に除隊になり、一週間ほどして、小隊を見舞いに行きました。魚をもっていきましたら、よろこんでくれました。

一期上の人たちは漁労班をつくり、また、自給のための農耕をして、いもをうえたり、キュウリを作ったりしていました。

シラミ、衣シラミがひどかったですね。ズボンからタオルをとりだして汗をふくと、肩にシラミがついていましたし、巻ききやはんの中で、シラミがはいまわっていました。水不足でしたからね。一週一度の風呂がわかされたことですが、中隊長がはいったあとで、私がいいたら、軍曹がきました。それで、すぐあがりました。ちよいとつかっただけのその風呂が、六か月間のただ一回の入浴でしたね。

マラリアで熱発して、室にいるときには、頭をひやしてもらいましたよ。

## 現地召集兵の証言

平良町大浦 砂 川 恵 勝 (二十歳)

昭和十九年二月に青年学校を卒業した。入隊をひかえて、部落で待期命令が出た。五月になって、下地の西飛行場作業に父が徵用され連日の作業で、過労のすえ体の調子を悪くしてしまった。父の代りに作業に出る事になった。西飛行場作業現場まで徒歩で行く。時間に間に合って行くのに午前の三時には起きねばならない。ホル貝を吹きながらして、二回鳴ると男子、三回は女子、互交に両方鳴ると男女青年という、きまりがあった。暗い中を起こされて、三時間以上も歩いて行き、夕方六時まで作業をした。家につく頃は十時近くになっていた。炎天下の人力だけの土運び作業は、すごく喉が渇く。水汲み当番の役で飛行場工場の深いつるべ井戸に水汲みに行った。これは、割りと楽な作業だと思っていたら、そこは順番を待つ民間人と兵隊で、ごったがえしている。立ったまま並んで、二時間から三時間は待たねばならない。ようやく順番が来て、汲み上げた水をかっいで行くと、こんなにごった水が飲めるかと兵隊はいう。お前は遊んで来たのだと難げをつける。立って順番を待つのは良いが、座ってはいけないと兵隊にいわれ、棒立ちになって、やっとの思いで汲んで来た水に文句をつける。いっその事、その水をこぼしてしまおうかと思ったが、反抗したとなくられるにきままっているからだまってしかられる。

当時、日当はあったが、債券、貯金にまわすといわれ、手にと

れていた。天皇からあずかった兵器でなぐってはいけない事になっていた。班長と教育係兵隊が軍医に銃でなぐったというなと、「演習中、ころんで、木のどげにつっこんだといえ」という。軍医が不思議がっている。いっその事真相を話そうかと思っただ、うしろに班長と教育係の助手が立っている。これをいうと、班に帰ってから死なされるかと思うと命が惜いからいえなかった。縫合して、くぼんだ三角形の傷あとが今でも頭左側部に残っている。あの時は十日間の休養を命ぜられた。

銃でなぐりつけないまでも、手でなぐる時、並べて二十人までは連続ピントをはるのだが、あとは腕がつかれるのか、革の帯かくでなぐりつける。それが反対側の方向に巻きつき、それを引くと転倒させられる。なぐった方は忘れても、なぐられっぱなしになった者達は今でもその手きびしいリンチは忘れん。大浦部落南のフジ家あたりも皆日本軍の陣地になっていた。そこに鈴木という中尉がいた。体は大きく顔の小さい男だった。

部下の衛生兵が隣の島尻部落に駐屯していた部隊にマラリアにかかった兵隊に投薬しに行った。ものすごい雷雨の夜、苦しがる兵に投薬してこの雨にぬれたら自分も病気になると思っただのか、そこで一泊して帰隊したという。連絡がなかったという理由で部隊逃亡の罪を着せて、その中尉は、半殺しになるまでなぐりつけた上、個人塚に入れて、水も飲まさせず、食も与えず、上からカンカン箱をかぶせて、生きうめ状態で殺してしまった。泣きわめく声が部落にまで聞えていたが、だんだんその声が弱くなり、あとは聞えなくなってしまった。

た事はない。自分の家の家畜類を売ってさえ、強制貯金をさせていた時代だった。

飛行場工事作業のめどがほぼついた頃だった。十月十日の空襲が来た。見なれない飛行機だなど見ていたら、バラバラ音がして、葉が落ちて来る。日本軍がもっていたものより大きく、ピカピカ光っている。それを見て、友軍ではないと、とっさに感じ、整地作業の現場から、逃げ出した。

十月十五日、

マスパリの郷土防衛隊に入隊。大浦部落の青年十三名のうち八名が町役場で徴兵検査をうけた。内検査、中検査、大検査と三回に分けて行ない、その結果は第一乙種合格といわれ、正式にアズキ御飯でお祝をされ、天皇陛下に忠義をつくして死ぬと訓辞を受けた。

松木を四角に切って、十キロの重さにした模擬爆雷で、戦車攻撃の演習をさせられた。本物の日本軍中型戦車が突進して来る。号令がかかるが、真正面に来る頃は土煙りで前は見えず個人塚から出られない。投げけるのが少しおくれると、それこそ、さんざんな目に合いなぐられた。

防毒マスクをかぶり、膝行演習をやらされた時だった。五百メートルも行かないうちに息苦しくなり、たおれそうになった。

マスクの顎の所に指をつっこんで息をしようとしたとたん頭部を重い何かで打たれ鋭い痛みが走る。手をやると血が吹き出し、その部分は引っこんでいる。目まいを起こして倒れる所を軍医の所へ連れて行かれた。銃先端の照星頂の所でうしろにいた兵隊になぐら

マスパリの部隊に入隊していた頃、満州(中華人民共和国東北地方)義勇軍から召集されて来たという若い、名前には分らないが上等兵がいた。衛生兵だった。体が丈夫でなく、暑さにやられて、くたくたになっていた。なまけていたといわれ、食もろくに与えず、それでも休養幕舎には入れてあった。鏡原にあった野戦病院は傷病病でいっぱいだったから各中隊に休養幕舎が作られていた。

その中で検温に来た衛生兵の渡した体温計をとり落してそのツノ(体温計水銀溜の部分)を割ってしまった。補給のない島で、体温計をこわした理由で、五年兵の兵長だったその衛生兵は、めちゃくちゃにその病人をなぐりつけた。その夜、なぐられていた若い兵が姿を消した。一週間後に探し出され、引っぱられて来た。富古も戦地扱いになって三日間、行方が不明だと死罪になるといわれた。中隊長がまるで豚を屠殺するかの様に棍棒でなぐっている。隊長幕舎の方から、ガーバガーパと棍棒のぶい音が手にとる様に聞えてくる。次の日も、又次の日の夜も。湯のみの半分くらいの握り飯を一コ、塩で味をつけて与えられ、三日後には、眼は全然見えず、顔中着くはれあがり、此の世の人とは思えない形相のふらふらの人に、兵舎の前の岩盤の所を、チツタ(石のみ)で掘れという。目が見えなくなっているから金槌で手を打ち、血だらけになった手で、自由のきかなくなった体で掘り続けていた。軍隊のおそろしさを目のあたりに見せつけられ、映画、テレビで戦争ものが出たら、今でも見る気がしない。戦時下を体験しない子供たちは見たがるが。

西原の伊志嶺酒屋の前に、当時西原部落一帯に駐屯していた部隊

の衛兵所があった。初年兵教育期間を終えて、待ちに待った休暇の日が来た。公用腕章を渡され喜び勇んで家に帰った。家に行ったから、何か喰べるものを持ってこいと、上級の兵隊にいわれて。その衛兵所の前まで来た時、呼び止められる。そこは道路に面してはいたが、十メートルも離れていた奥の方だったから、それに雨がどしや降りて外とうに頭布がついで、側方は良く見えるわけがない。衛兵が立っているかどうかも分らない。呼び止められ、君たちは家に帰るのかと聞く。公用腕章を見せると、衛兵所の前を通る時は、必ず歩調をとり、敬礼してから通るんだと、さんざん難ぐせをつけて、しかられ、敬礼すると、今度は頭布の上から敬礼とは何事かとしかられる。その後、昭和二十年の六月には伊良部島から、移動して来た通称、碧部隊といわれていた西原に兵隊がいたが、別名、ハダシ部隊といわれていた。下士官以上の階級しか軍靴もはけず、下級兵ははだしで歩いていた。こちらは初年兵ながら靴が支給されていたから、それも、米軍が上陸して来たら、島出身の若いわかれわかれが、最前線に立たされる事になっているためであろうとは思ったが、上等とはいえないまでも、軍靴だけははいていた。前にさんざんしぼられた場所だけに、その衛兵所に気をくばりながら、敬礼しようとする、一瞬向うの衛兵たちがいつせいに立ち上って敬礼するのではない。びっくりして背すじに寒気を覚えながら、うしろから又呼びとめられるのではないかと背中をぞくぞくさせながら、その路を通りすぎた。路を歩くと云う事が敵機空襲の危険だけでなく、軍隊のいる島では緊張しなければならなかった。

大浦部落の南海岸に、軍需物資の輸送船が、空襲で被弾し、沈没間もなく離婚し、ブラジルに移民して行った。大事にしておいたらしい兄の写真その時、返して来た。今、仏壇にある写真が唯一の兄のおもかげです。両親と兄をなくし、妹二人をかかえて家をたてる資材を得る事もできないまま、大浦海岸のそばにある畑の番小屋すまいの生活が、戦後三年間も続いた。

### 女子報皇隊員

平良町西原 山里 ハル (二十二歳)

昭和十九年五月、下地に陸軍の飛行場作りの作業が始まった頃です。町役場から徴用令状が来ました。

区長の所からとどけて来た令書には五月十五日、午前八時、西飛行場へ集合、ツルハシ、スコップ、毛布、針、糸、弁当、その他身のまわり品等持参する事と書いてありました。

戦時下だし、女子が作業に行く事も致し方ないとしても、毛布も持って来いという事は何を意味しているのだろう、夜は慰安婦の役をさせるのだと泣いていました。部落の女子青年団員、十二名の令状をめぐる、顔色を変えて区長の所へとなりこんだ母親たちで、部落中が大きなざわざわになりました。

「徴用に応じなければ、沖繩本島に強制徴用してつれて行く事になる」といわれ、同じ死ぬなら沖繩本島に行くよりは、島に居たい。ただし、住み込みではなく通勤を認めてもらうという事で、話がようやくまとまりました。

をまぬかれるため、そのまま砂浜に乗り入れて来て、掴坐した。炎上してしまっても何が残っていないのに船の形だけは残っている。空襲に来る飛行機がそれをめがけて、必ず銃撃を加え、集中爆撃を加える。岩にのりあげているから、沈みようがないのに。その流れ弾が部落にとんで来る。低空機銃掃射を加え、去りながら、うしろの砲からも撃つて来る。下地カメヒコ氏、仲間マツさんは被弾して即死した。部落東方の通称パナタガの日本軍砲台から豊式砲を撃った。米軍機が落された。その搭乗員を救いに水上機が飛んで来た。そしてそのお返しに大浦一帯を部落ごと攻撃する。全焼した家は十二軒もあり、家を焼かれた人や、空襲をさけて壕生活を強いられた人々が、穴ぐら生活をしていた。大浦の西方、通称トンビヤン(竜舌蘭)壕には、戦争が終っても、家を作る事が出来ずそこに任んでいた家族がいたが、食糧もなく、栄養失調で、とうとう餓死してしまっただ。台湾出身の人でその人の妻が大浦の人だった。マリアアで死ぬ人が続出し、ある家では、一家全員が、高熱におかされ、ヤドリー(家倒れ一家根絶)しそうになった。来る日も、来る日も、人が死ぬので、棺桶を作る板もなく戸板にのせて運んでいた。

私の家も部落はずれの畑のそばで仮小屋を作って任んでいた。父はそこで悪性マリアアにかかり、他界した。母は、召集されてニューギニアに行かされた長男の帰りを待っていたが、戦死の知らせと共に遺骨がとどき、それから間もなく、母は死んだ。とどいた遺骨箱の中に、遺骨はなく、小さな位牌だけが入っていた。兄の婚約者が、六年もその帰りを待っていたが、その後他家の人と結婚したが、

早婚をすすめる時代でしたが二歳の時に両親に死別してしまし、姉と二人暮らしで生活も楽ではなく、それに部落の男子青年で十八歳以上の者はすでに徴用されて、飛行場や陣地作りの作業にとられていたのです。二十歳もすぎ、独身でいるから、そうだったと、ミーダツバツ(女性独身者への罰)だということです。「生めよふやせよ」の時代でした。十二名も子供を作った人たちがいて、それだけで軍団の母々としての名譽であったのです。

五月十五日、集合場所は西飛行場作業現場から町役場の広場に変更され、役場の人や兵隊の訓辭がありました。

「これは、お国の為であり、進んで、いくさのサキバイ(先立ち)になりなさい。この隊は女子報皇隊と名づける。当面の任務は兵隊さんのために飛行場方面の兵舎作りをする。そのために、各部落に供出させた資材の運搬作業である。」

長い剣を下げた軍人を真近かに見るのも初めてだし、それにも増して、沖繩本島に、この戦さのさ中につれて行かれるのはおそろしかった。「いう通りにするか」と気合いをかけられ、私のほか西辺、島尻、成川部落の女子青年十二名、長間ヨシ(現在赤嶺姓)永田ハル、上里千代、赤嶺ハル、池間静子、下地光子、仲間ハル、仲間ハツ、越南タダシ、仲宗根初子、長田ハルはその日からこれも各部落から徴用して来た馬車班の人たちの荷車にのせられて、大野山林に行きました。当初のうちは、遠い飛行場まで歩いて通うより、部落の近くだし、いつも薪ひろいに行っている場所での作業だし、割りと楽だと思っていました。兵舎作りの材料といっても、せいぜいその屋根をふく茅運びだろうと思いましたが、松木の丸太運

びです。馬車の通れる路まで、松木丸太を選び出し、積み上げておくのです。林の中は路らしい路もなく、起伏がはげしく、一歩あやまればかついでいる丸太の下敷きになりかねないので。原始林の様な森の中は、アダンや、サルカ(猿かきみかん)の刺のある木が密生して、人の高さよりも高い。真昼でもうす暗く、それに五月のむんむんする暑さの中での作業は、それは男の人にも、きつい仕事です。

一日八十銭の給料をもらい兵隊用と飛行場作業へ徴用された島の人々の住居作りが終った頃、今度は、飛行機をかくすエンタイ壕のための細くて長い丸太を切り出し、運ぶ事になりました。今までの大野山林と違い、西辺部落よりも遠い野田山林や大浦、南静園あたりを運ぶため午前の四時に集合しなければなりません。その時間に野田まで行って集まるには、午前の二時に起き、朝食を支度しなければなりません。夜が明けきらぬうちに作業現場にたどりつき、トラック十六台の積荷を終えたあと、今度は馬車が来るのです。馬車積の運搬作業のあと夜七、八時頃家にたどりつく頃は、立つ事も出来ない程、つかれはててしまいました。今思うと病気になるなかつたのが不思議なくらいです。下地の西飛行場用の兵舎作りが完成しないうちに、飛行場をもう一つ作る事になりました。そのための資材搬出で、大野山林は大かたバツ採され、道路近くには木がなくなり、山の奥にはまだ木があります、そこから材木を運ぶため、道路作りをする事になりました。現在の亜熱帯植物園の東側五百メートルのくぼ地の所です。兵隊六人と女の子十二名だけで、人力だけで岩をけずり、土砂運びをしました。たいへんな難工事です。

で、荷揚げ作業をするのですが、朝鮮の人たちは特に、いじめられてなぐられておった。食事時間も三十分くらいしか与えない。休憩時間も能率が下がるといって休ませない。荷揚しながら自分の国の歌だといって、アリランの歌や、その他、五つくらい歌を覚えてくれたのを覚えてる。米俵に機銃弾があたって、こぼれている。ピーキた(穴のあいた)所から米が流れている。米は大切だがもつたいたいと思いがち、それをもって帰ったら、兵隊の食糧が不足すると思うとひろって帰る事もしなかった。

二十年の六月の空襲以来、船も人港しなくなり、宮古島の兵隊は自給自足をしなければならなくなりました。そのための補給班として、塩たきをやらされました。西辺部落の海岸のそばで、ドラム缶を縦に切り、海水を汲んで来て煮つめるのです。そのための潮汲み作業が続いて、今度は敵が上陸して来たら、火を燃やす事が出来ないからと、木炭作りが始まりました。飛行場用兵舎に使った松木の枝葉集めをして、火を燃やす所から出る煙が、釜の所から遠い所が出る様工夫されていました。紙も不足しているからとツノマタをドラム缶で煮て、上質ではないが紙らしいのが出来ました。その他にいっつけられるまま、石灰燧きや、炭俵や、細や、ゴザ作り等をやらされました。今でも特に想い出すのは、アツママお嬢の東側にあった製材所で、奉公隊に徴用された二か月目に、製材作業を女の子だけでやらされた事です。一歩あやまれば、回転のこで体ごと切られかねない全く危険な作業でした。

食糧は初めのうちは一日一合を報皇隊員には特配していましたが、軍人なみに飯盒の支給もあったものの、家族の者と一緒に食べ

が、それが出来上がる頃は、丸太運搬だけでなく、その道を通じて、軍用の自動車や、大砲などが、大野山林に入ってきた。兵隊も真黒に陽焼けしていた。初めて先頭を通る隊列の将校が、「道をあけるノお前達オキナワカ」とどなり乍ら通って行く。こんなに困のためといって協力させられているのにほんとに腹が立つてしまいました。一人前の兵隊あつかいにされてない兵隊と日本人でないかの様にいわれた私たち女子報皇隊の者はくやししい思いでした。

十月十日になって空襲が始まり、そのさなかを野原の師団本部まで芽を満載したトラックに乗って行きました。せまい曲りくねった畑道にさしかかった時、いきなり低空で飛んで来て機銃掃射のねらいうちをうけそれをさけようと車スピードを出しました。スピードを出しすぎて車が畑の中へおちこみ横たおしになり、あやうく下敷きになる所でした。あんまりおどろいて、魂を逃がしてしまつた。みんな若い顔をして、お互いの無事をたしかめ合せて、各人道ばたの小石を拾い、私の魂よ、一緒に来い、と小石をふところにいれ、命のあるのをたしかめたものです。

昭和二十年六月平良港に入港する船団が運んで来る軍用物資の陸揚げ作業につれて行かれました。材木や、米俵の外、針、石ケン、衣類、毛布、蚊帳などの梱包をはしけで運んで来るのですがまだ半分も荷揚げしないうちに空襲が来るのです。特に港はねらい撃ちされました。コンクリートの突壁の影に身を伏せて、もう死ぬんだと覚悟しました。体をかすめて、機銃弾がはじけて行く。沖では船がボンボン燃えて行く。西辺から通う道路もおそろしかったが、ここでは身をかくす壕もない。ほんとに泣いておった。その合間を見

られるからと家にもって帰っていた。海上補給がたれるとそれもなくなり、加えて、山林の乱伐がたつたのか、保水力がなくなつて、島民と兵隊が汲み出す井戸の水が少なくなつた上に、干ばつが続いたりして食糧事情は益々悪くなりました。へびやとかげを、あげくのはては蟬の半焼したものまで食べ、アダン葉の白い若芽を抜いておつゆの実にして食べたりしました。

極度の疲労と栄養失調、それに加えて、悪性のマラリアにかかり、班長をしていた、長田ハル、仲間ハツは戦争が終って間もなく二十歳くらいの若さで、死亡しました。

私は体は大丈夫の方ではあったが、毎日の作業の疲労で、家にたどりつくと、くずれの様に床につき、夜間空襲が来ても、壕にも入らず、いつかは死ぬべきものと覚悟して一人で家の中で寝ていた。結局、家族と一緒にいる事がなかった。夜も、昼も。

戦後、間もなく姉も死亡し、姉の残した小さい子供四人を育てる事で、私の青春は終ってしまった。義兄が後妻を迎える事になり、子供たちも大きくなり、私は家を出て、自活する事になった。三十六歳の時です、過労のたたりは病気がちになり、独身のまま、今でも医者通いをしています。

足かけ三年間、こき使われ、あの当時の話は想い出したくもない。

#### 生活をかかえた防衛隊員

平良町東仲 佐久田 寛(三六歳)



農業で生活をたてていました。

昭和十九年十二月一日三十六歳で特命召集者としてウナトウ部落にて二か月間の軍事訓練を受けました。夜具や服装の支給もなくバラック建ての兵舎はカヤをしいただけの土間で床もなくむしろさえもありませんでした。食器も持参せよとの事でしたが、弁当箱だけもって行き、汁器には罐づめの空罐をお腕代りに使用しました。塩をとかしただけのおつゆに、にぎり飯一コの食事で、体がもちません。そこで家から味噌をもつて来て、それをとがして味噌汁を作るのですが、手足を洗う水どころか、食器のカンカラを洗う水さえないので。服装も一着しかないし、雨にぬれると、それを火のそばで乾かして又、着るのです。しらみだらけになりました。

二か月間の訓練の後で、中隊編成され、下地御嶽の西方に兵舎を作り与那覇部落で自活班として、耕作作業や、甘藷植え作業をしました。

与那覇部落での耕作業が一月間続きましたが、飛行場のそばは危険だといって、山中部落に移動しました。所が、山中部落の真上が空襲に来る飛行機の通路になっているのです。ちょうど、昼飯をたべようとしている時でした。ブラック兵舎めがけて、機銃掃射をうけ、一緒に座っていた、東川根の小禄氏がみんなが見ている所で即死し、負傷者が出ました。目の前で人が死ぬのを見るのは初めてです。ほんとおどろきました。山中部落内では、六名の家族の家が、外で遊んでいた子供は空襲が来たのでカヤの下にかくれ、家族は防空壕にかくれたが、その壕に直撃弾が落ち、全滅し、かやの中にかくれた子供だけは助かるという事が起きました。こうなると、

には、それが流れて来て、金さえ出せば、米を売って呉れる所がある事を知りました。妊娠三か月の妻や小さい子供達のためにそれを買に行きました。その米もなく、食う物がなくなると甘藷を探しに行きました。空襲のさなかもぬすみに行つた事もあります。うえて来ると人間は恥も外聞もない。私の植えた苗のいももぬすまれるが、お互に生きねばならんからと、それはもう仕方ない事と怒る気にもなれない。とられる人がそん。とる人は得。そんな時代でした。

もと会社員だったという渡辺という隊長が、おとなしい人だったせいもあり、ほとんど壕の中ばかりいた人だったが、私たちの家の事情も知っていて、作業時間に会って帰隊する様に注意して、隊を脱け出す事も、大目に見てくれた。

働き手のない家族の生活費をかせぐのに、カーラバリに知人のいた事を思い出しキビの汁で作った酒の買い出しに行つた時だった。私を含めて三人の特命召集者で、隊を脱け出し、一人で二升ずつのヤミ酒を知人のついでようやく手に入れたのですが、その知人宅で一休みしている時でした。来間沖に、ずらりと船が並んでいるというのです。あれは日本の船ではない、いよいよ上陸して来るのだと部落中が大きなわぎになりました。もう死ぬのだと思いつつも、一升ビン二本を下げて、帰隊すべく急ぎました。ヤババリあたりまで来ると、物すごい音で艦砲を撃ち始めるのです。道ばたに伏せたのですが、ふと見ると、北向になった墓地があり、その入口が真新しいしっくいでかためであるのが目についた。棒切れで、そのしっくいをかき落し、二段に積んであるその入口の大きな石を三人でのけ

生きるも死ぬも、運にまかすほかはないと、何としてでも生きようと、決心しました。家にはまだ小さい子供が三人もいて老母をかかえた身重の妻だけではどうしようもなく、働き手の私が何とかしなければ生活して行けない状態でした。昼間の空襲で飛行場の滑走路にできた大きな爆弾の穴を埋める作業が夜間行なわれるのです。そのうち夜間も空襲が始まり、一日で二十か所も大きな穴をあけてあった。飛行機が飛べる様に石垣をこわして来てたりない分は、ドラム罐を運んで来て、その弾跡の穴うめ作業をするのです。徹夜の作業をするため、夜寝る時間はほとんどなかったのですが、昼は隊を抜け出し、家族のための食糧さがしをしました。空襲下の食糧探しはそれこそ命がけです。

機銃弾で死んだ馬肉を焼いて喰い、それを夜間作業の終ったあと、明け方になって平良の家まで歩いて帰るのです。平良まで、たどりつくのに来襲する飛行機から身をかくすのに路ばたの滞に身を横たえては又走り出すのです。わずかばかりの手持ちの金で、多良間島から久松部落にヤミタバコの葉が来ている事を聞き、それを仕入れて来ました。民間人の吸うタバコは全くなかった一斤で八百円でした。それをきざんで、美濃半紙で巻き、一本二円で売りました。丁度、もとの二倍になりました。そのもうけで、部落の家々で、ひそかに作っていたヤミ酒を二升三升と買いそれに水を割って、三升の酒を四升にするのです。その酒を部隊の兵隊に売り、海軍の部隊にも売りました。ヤミ酒一升百二十円でした。昭和十八年頃まで一人あたり二合の配給制だった米はとくになくなっていたが、部隊の倉庫係の兵隊が横流している事を知り、ある民家

いつでも入れる様にしておいた。また新らし棺桶が白く見える。目の前で人が死ぬのを見た事もあるのに、墓の暗い穴の中の白い棺桶は、薄気味悪い。だが、次第に地響と炸裂音が激しくなるにつれて、そんな事にかまっておれなくなり、棺桶を押しつけて中に入った。墓の隅の方にすさまじい金属的な炸裂音と共に島全体がゆさぶられる様な震動が墓の中にまで伝わって来る。目の前の棺桶が地響と共に動いているのが、良くわかる。中の死人がうめき声を上げて来る様な錯覚におそわれながら、その穴の中にひそんでいた。実際には三十分間くらいだったと思うが、腐臭と共に過す時間は三時間くらいに思える長い長い時間だった。

艦砲が止むのをたしかめて、墓の庭においてあった二本の酒ビンも無事である事を確かめて、々許して下さいこの仏さん々と墓のフタ石をもとにもどし、隊まで帰りついた。酒ビンは隊近の畑の中にかくして、若し上陸して来るなら、こんな小さい島では死はまぬがれないし、同じ死ぬなら、家族と共に死のうと、三人で隊を脱逃する事を申し合わせていた。町の中や、特に飛行場北部周辺は都厚いギザギザのするどい刃物の様な砲弾破片がいたる所に落下し、地下水が湧いて来るのではないかと思われる様な深い穴が道路を寸断していた。それをまともなうけて死者が出ているという話が伝わりました。露天にさらされていた家畜類は大部被害を受けたとのことでした。そこら中の畑が赤土に到るまで掘り返されて、人の二人や三人では動かす事の出来ない大きな岩石が巨人の手で手つかみにしてそこら中ばらまいた様な状態で白っぽい石の原っぱに変えられていた。



いよいよ戦争は負けると、吾々もわかって来たし、つとめて隊を脱け出す事にしていた。わずかばかり植えてあった大豆がニヤットの西側の畑にあった。それを刈りとっている時空襲を受けました。ニヤットの丘の上にあった海軍兵舎の大きな水タンクをめぐけたものか、飛行機が急降下して来るのです。逃げるひまもなく畑のそばのサルカキヤナギの中に頭だけつこんで、身を伏せたのですが、耳をつんざく様な爆発音と共に、体全体に土砂が降って来てうずたかく積もるのが分かるのです。

おうていた目と耳をあけて見ると、私の西方八十メートルの距離に爆弾が落され、大きな穴があいている。穴の大きさと深さから二百五十キロ爆弾とわかりましたが、せっかく刈りとった大豆はあとかたもなく爆風でふきとばされてしまいました。一人一人で動かせる石が畑のそばに落ちていて、それをまともに受けていたらべしやんこにおしつぶされ即死している所です。今でもその弾跡と岩石が草むらにおおわれて残っています。

二十年三月頃、町の中を空襲し始める頃東仲の住居が焼かれてしまいました。あの日は山中の部隊内にて町が燃えているのを見ました。三日間の休暇を願い出て、家にたどりついて見ると家は全焼してあとかたもない。かねてから万一の時はニヤットの畑に逃げる様、家族には指示しておいたが、八十余歳の老母を初め子供たち三人をかかえて妻はお腹の大きな体で畑のそばで着のみ着のまま逃げて来て途方にくれている。三日間で、この家族のために小屋を建てなければならぬのです。すぐ近くにそのり山の町有林があり、そこには町役所の番人がいる事を知っていました。尋常な手段で

まいりました。

飛行機が遠のくのを確かめ、近くの壕に上の子は走らせ、小さい方を小脇にかかえ逃げこみ、あやうい所を助かりました。

### 少年兵の体験

上野村字宮園 宮 功 (十六歳)

昭和十九年、宮園部落の十六歳から十九歳までの男子は少年兵として正規の軍隊に組み入れられていた。兵隊が足りんからといって、その年令を一年くり下げ、満十五歳の私も、宮園部落に駐屯していた長谷川大隊の西村小隊に編入させられた。

陣地の壕掘り、小銃、機関銃の換作法の訓練を受け、今、博愛ビーチといっている海岸の東部のバー(がけの事)で実弾射撃を何回かやらされた。

十キロ入りの模擬爆薬一個と、手榴弾十個を渡され、深さ一メートルのたこぼ壕にひそみ、戦車が来るから、それに向けて投げろといわれていた。所が、十キロの重さの模擬爆薬は精一ぱい投げても十五歳の少年には二メートルしか投げられない。自爆せよといっているに等しかった。

自分達の島を君たち自身が守るのだといわれ、兵隊のやる事は何んでもやらされるが、喰いざかりの少年には空腹がこたえてしまった。ふらふらして自まいを起して来る。それを見かねてか、五十歳くらいこの年とった兵隊が、伝書鳩の餌用の豆を小さな石油ランプで

は、その木は切れないし、昼間から酒を飲み、その勢いで松木を切りたおし始めました。案の定、管理人がとんで来てとがめだてるのです。「君勝手に木を切るのか」というのです。「私勝手ではない、だがこの子供たちを雨にうたしておけるか、町有林はみんなのものだ」と口論しているうち、町長の許可をとって来い。さもないと、知らないぞ」とおどすのです。こちらはそのため酒をのんで勢をつけているし、「君こそそこにつっ立っているとひどい目に会うぞ」と、わざとその男の方へ松木を倒してやりました。あきらめたのかその場を去りました。そのすきに丸太を運んで来て、支柱の材料をそろえました。綱もない。カヤ束もない。徹夜でなまのカヤで縄をないました。カヤを刈りとっていたのでは、三日間では小屋は建たない。夜陰に乗じて、近くの兵舎の壁のカヤをはがして来ました。屋根と壁らしいのが、出来ましたが、床がないのです。妊婦にとって冷える事が悪い事を知っていました。五寸ばかり土から離れて床をつくれれば冷えこまない事を知っていました。町の東方に民家を壊して兵舎を建てるべく集荷してある事を思い出し、夜、床板を見張りの兵隊の目をかすめて運んで来ました。

生きるためには家族を守るためにはと思いそれこそ必死でした。飛行機から機関銃でねらいうちされた事もありません。畑に出て、子供も二人そばにいていもの植えつけをしていた時です。爆音と共に飛行機の近づくのが見え、あわてて近くのお嶽のいでいこの木の下に子供をかかえて逃げこみました。パシリと音がしてデイゴの枝が落ちるのを見上げる間もなく、足もとの石に機関銃弾がバリバリとはじけ散るのです。二人の子供を両手にかかえこみ、うずくまってし

妙って喰わしてくれた。鳩が喰った事にするから班長にはいいうなといて自分も一緒に喰っていた。カエルや蛇を喰べつくしたあとは、ソノリ(海草の一種、普段は食用にはしない)や、バッタ、カタツムリ等を喰っていた。

昭和十九年十月十日

米軍機による初めての空襲があった日、中飛行場作業に行っていた。日本の飛行機が演習しに来ているのだと思っていたが、飛行機のマークがおかしい。日本ではない。宮占まで敵が来たら戦争は負けだといわれていたから、敵の飛行機とは思わない。第一滑走路のそばで、土運びの作業を続けていた。

急降下しながらバリバリと機関銃の音を聞いて、初めて空襲だとわかった。あわてふためき、作業隊は蜘蛛の子を散らす様に勝手な方向へ逃げて行った。逃げおくれた私は、すぐ近くに日本の戦闘機が一機降りていたので、飛行機は金属だからその下は安全だろうと思っただけで、その下へとびこんだ。そしたら兵隊がとんで来て、お前らは命が惜しくないか、それを目がけて(ねらって)いるのだぞ、逃げろとわめく。その翼の下から一目散に逃げ出して何分間走り続けた。爆発音にふり返るといさつきまでその下にいた飛行機に直撃弾が命中して燃え上っていた。二分間おくれたら死ぬ所だった。

昭和二十年五月四日

陣地の穴掘り作業をして昼休みの前だった。東の海に軍艦がずらりと並んだ。十三隻ばかりいた。頭の上を目に見えて砲弾がとんで行く。ぴかりと閃光がしたかと思うとものすごい艦砲音と共に飛行場方面がやられている様子で甲戦艦下令になったという。昼食が出

だが、兵隊は憤病でごはんも喰べきらん。ぶるぶるふるえてげーとも巻きまらない。いよいよ上陸だと重機関銃や軽機関銃等渡されて陣地に配置されたがペタンと壕の中にすわりこんで穴から出きらん。普段お前たちの島を守りに来たと言がりがりばかりいっていた兵隊が、こんなものかと思うと心細い思いであとはばからしくなってきた。三十分ばかり物すごい地響きと炸裂音が続いて、軍艦の群れが北へ移動して行った。

二十年六月

夜、月が十時頃出て来た。旧歴の十九日頃だったと思う。現地召集で宮園の駐屯部隊にいた垣花三郎伯父と陣地の不寝番に立つ事になった。線香に火をつけて、その一本が燃えつきる時間が、不寝番交代の時間区切りになっていた。伯父がお前は子供だから、もうおそいし少し寝なさいという。伯父だけ長く立たせては悪いし、線香を半分折ってみじかくして寝た。最後に立つ人はその分だけ長く不寝番に立つ事になる。昼間の穴掘り作業で、つかれきっていたし、小屋の中でうとうとしかけた頃、人の声で目を覚ます。

「どうして寝ているか」と尋問している。野村という一等兵が陣地を抜け出して時間すぎに帰って来た所だ。しまったと思ったが、こわくて何もいえない。伯父が「まだ少年だから寝かせておいた。その代り自分が起きている」と答えている。野村が「兵隊とはそんなもんじゃな」としたたか頬をなぐりつけた。

月明りの中で小柄な伯父がよるめくのが見えた。あたりは誰もいない陣地の入り口。普段はおとなしい、人に大きな声を出した事もない人のいい伯父が「二人一緒に寝ていたのではない」と起き上る

といって兵隊をおどしていた。

空腹をかかえて民家へ行った兵隊が、わずかばかり残っていた砂糖きびをしぼって、それを煮ている所へ来て、いっばいくれというのでくれてやった。固まる前の黒砂糖だからかなり熱い。それでいて湯気は出ない。部落の人はまさかそれを飲むとは思わない。

上官の見ないうちにと買ったのかそれをぐつと飲んだ。兵隊はやけどして死んだという。

マリアと栄達失調で、民間人も兵隊もやせこけていた。

## 現役兵

上野村野原 砂川昌良(十九歳)

## 陸稲のこじ

戦争のときの想い出といえ、先ず、陸稲のことですね。

その年(昭和十九年)の陸稲はとくに出来がよかったですね。それが、あと四、五日で収穫というときでした。

「あと四、五日まってくれ」と頼みこみました。だが、強引にきりはらわれてしまいました。畑の主たちは涙を流していましたよ。それを眼のあたりにみた私は、あまりに残酷な仕打ちに、人間として許せることか、といかりがこみあげてきましたよ。

私のうちは、第一滑走路の北西方の北の端で、滑走路内ですの、引越しです。畑の八十パーセントは、運悪く滑走路の中心部にありました。うちの人は、なやみぬきました。もったいない。あと四、五日で収かくできるよかったです陸稲をみすみすてるのかと。そ

なりトーンギー(いばら科の植物)の密生している林の中へその兵隊をおし倒した。野村が倒れる所をけつたり、ついたりもう無我夢中にたたいている。野村はぐったりしてしまつた。「これは困つた事になった。明日になったら大変な事になる。もう止めたが良い」とふるえながらいったが、「やりかけたら気のすむまでやる」と、「どうせ明日は二人とも重営倉だから、覚悟の上だからやる。あんたは今ごろ帰って来たんだから、どうせ部落で悪い事をして来たにきまつているから、あんたがいつけるなら、君が何時に帰って来たかを僕らも班長に報告する」とその野村をつきはなした。翌日その兵隊は上官に沈黙を守ったのか、何事も起らずにすんだ。

自分たちの事はさておいて、理不尽な人あつかいに不満があったし本気でやれば島の人が強いんだという事を初めて知つた。

壕掘りの合い間に、小銃の手入れをさせられた。分解してみがき、スピンドル油を塗って組み立てる。焼けつく様な日中で、暑いから、銃を足の間にはさんで帽子をかぶり直そうとしたら、小銃が地面に倒れてしまつた。誰も見ていないと思つていたら、遠くから伍長が見ていたらしく、「そんな兵隊があるか」ととんで来て顔をたたかながらつめた。くらくらと目まいがする程なぐられ、一度はとり上げた銃を地面にたたきつけてやった。伍長はかんかんに怒つて、「もうお前は重営倉行きだ」という。止むを得ん、もともとわざとやったわけではないのにと思いつつも、重営倉行きを覚悟していった。伍長におどされながら班長の所へ連れて行かれたが長い訓話だけですんだ。

重営倉がどこにあったか覚えていないが、何かあると「重営倉」

れで、那農会の伊志嶺栄さんを通して設営隊長に折衝してもらいました。吉岡隊長は、すごいけんまくで拒否したといえますね。

滑走路からだいぶはずれた処について、そこだけは何か待つてくれと頼みこみましたが、それさえ全くきいてもらえませんでした。仕方がないというので、青刈りして、馬のえさに使つたりしていました。

土地代は形の上ではもらいました。だが、強制的に凍結貯金です。未だ、実質的支払いというのはうけていません。戦後は、境界線もはっきりしないまま、大体の検討で、開こんし、小作料を払って耕作しているんですがね。

土地をとりあげられた後は、本家にすぎりました。幸い本家は財産が多かつたので、その畑のいもをわけてもらつてくらしてまいりました。

この飛行場は、陸軍の中飛行場で、全部で三十四万五千坪といわれています。二本の長さ一、五〇〇米はば五十メートルの滑走路がつくられました。第一滑走路がほぼ南北に、第二滑走路がほぼ東西に走り、南の方で接合される予定だつたようですが、接合点の方にくぼ地があり、その処は難工事、最後まで接合されていません。たぐさんの住民が動員され、小学生まで作業にかり出されましたが、私は、この飛行場建設には、一回も参加しませんでした。

当時私は、中学五年生でした。二期期になると、私たちの県立宮古中学校の校舎も部隊(海軍警備隊)が使うようになり、学校近くの民家で授業することになりました。私たちの教室は学校の東にある無電塔の東の民家でした。

卒業式は学校の広場でのので、うちを出たのですが、空襲がありまして、登校の途中からひっかえしました。あとで配られた卒業証書は、B5の用紙ほどの大きさのものでした。

卒業したら徴兵検査でした。第一乙種合格です。みんなをかり出す意図での検査です。友人の夜盲症の人も合格です。入学して、非常な困難にあったということですがね。

### 逃亡未遂

中学卒業して、一時、五六二〇部隊（歩兵第三連隊）の経理部に通いましたが、採用は断られましたよ。そして四月には、入営です。野原に本部のある五六二〇部隊です。その十二中隊に入りました。中飛行場の南の端にあたるソバンミ（側嶺）の兵舎（バラック）で三か月の訓練をうけました。

入営すると、軍服の分配がありました。新しいのから古いものまでがまぎったものをボンボン配っていきます。他の人は、長い袴（ズボン）が当たりましたが、私のは半袴でした。

半袴は運の悪い当りでした。不寝番でひどい目にあいました。時計の針をまわして、どんどん下番の方にまわっていきますね。最後の方は、何時間も立たされてしまいますね。中には寝る場所をとりかえてねる人がいるのです。この方が私の次だと、時間がきたというので起すと、別人なのです。どやされます。ところが、私の場合、それができません。何しろ半袴です。半袴のままねるし、逃げかくれができませんでした。六か月の軍隊の期間、それ一着だけですごしました。

が本当でしょう。これは昼夜交替でやりましたね。

銃はありましたが、実弾射撃の訓練を受けたこともありません。

歩兵部隊ですけれども軽機関銃もみたことはありません。

この頃の隊長は、今日流でいえば、民主的な人だったとおぼえています。隊長の処で、不時着した米軍機からの没収品というのを見せてもらいましたが、その中の地図ですね。これにはおどろきました。タコつぼに至るまで、鮮明にさつえいしてあるんですね。直撃された処には×印がつけられて、手にとるようにわかります。あの手はうまくやっていたんですね。

野原に大佐がいましたが、この人は、初め野原公民館にいたようです。処が、そこがやられたんですね。そこで砂川という人のうちに引越しました。そこも直撃をうけましたね。そこで地下壕の方にうつったんですね。そこも見事に直撃をうけているんですね。堅固にできているので、どうということはないようですが、スパイではっきりしているのではないかと思いましたよ。

その頃、私は、一応幹部候補生ということでした。しかし、幹部候補というものが考えられなくなることが起ってしまいました。

月の晩でした。野原出身の初年兵と二人で兵舎をぬけだして、わが家へ帰りました。うちではよるこんでもらい、砂糖をもってかえってきました。運がわるかったんですね。みんなが不時呼集で警戒に当たっているんですね。あとでわかったことなんです、二人の営倉破りがあったんです。それを探していたわけなんです。営倉破りとまちがえられて、私たちはつかまえられてしまいました。

取調べを受けたのですが、はずかしいことですが、軍隊は要領だ

入営の日には、軍靴も配られました。これの方はいいので、とてもよるこんだのですが、その晩のうちにぬすまれてしまいました。習朝、不時呼集がありました。いくら探してもありません。仕方なくはだしのままでました。当然のことながら、どうして軍靴をはいてないのかと、しかられました。事情をいうと、とられたのがわるい、というのです。それでも、もってきてくれました。その靴は、片方が十一文で、もう一つは十文半です。片方は足がはいりませんというのですが、きき入れてもらえません。くつに足を合わすんだと、とりあってくれません。

軍靴はその後、はくことはありませんでした。アダン葉草履が配られそれをはきました。それも一回限りでしたから、すぐすり切れましたから、あとは、はだしで過すことになりました。訓練で、外を歩くことはそれは大へん難儀なことでした。

きたきり雀の裸足の兵隊です。シラミもわきました。シラミのかゆみがすくなくいときは、それはさびしい気さえ起る生活でした。

ソバンミの訓練期間の三か月は、空襲の連続でした。飛行場の戦闘指揮所のすぐ南の松林の中に兵舎が作られ、そこに住んでいたのですが、すぐそばに、三門か四門の高射機関銃をとりつけてあったが、そこがねらわれたんですね。空襲があると、所持品をもって防空壕に入るのです。はけない軍靴も肩からぶらさげてですね。

壕の中に入っていると、ロケットをくりました。入口の処で、豊原出身の山口さんと本土からきた兵隊がやられました。おどろいて逃げだし、もつと安全な壕へとうります。そうですね。訓練といっても、それより避難のための防空壕づくりが主だったというの

というので、うそをつきましたね。その前日に、ものすごい空襲があつて、野原方面は全滅だという話でした。だから、家族の安全だけでもと、実はうちへかえったわけなんです。そこでついたらさというの、そういうわけかえろうと思ったが、そして、一応小隊をはずれて出たが、思いなおして、行かないで、もどったということにしたのです。逃亡未遂ということで説教されました。

うそも方便というのでしょうか、上官づきで、その翌々日は、うちまで連れていってもらいました。それで、幹部候補どころじゃなくなつてしまいましたかね。

一緒だった野原のひとの方は、うちは破壊されていましたが、家族は避難して無事だったし、私の方は、全壊まではしていませんでしたよ。

営倉破りの方は、翌日みつかりました。一人は宮古の人でしたが、これは普通ではなかったんですね。つかまったのが野原付近だったようですが、隊長（大尉）の服をぬすんで、それをつけていたというんですからね。営倉は民家にあるような防空壕の出入り口に丸太を組み合わせたとびらをとりにつけただけのものでした。

### 腹のわるい隊長

ソバンミの頃は、隊長には恵まれていたと思いましたが、中には目をつけて、初年兵いじめをする古年兵もいました。

カザンミに移されたのですが、そこは独立した処です。それで小隊（そう呼んでいた）は、小隊分の食糧、米や砂糖、かんづめ類を掩盖のある壕の中にもっていました。あることはわかっているの

すが出してはくれません。

その頃、一番まいったのは、小隊長（中尉）のことですね。慢性の腹の病気の持主だったのでね。そのために睡眠が普通にとれなかったんですね。そんな年とった人にはみえなかったんですが、不養生の仕事の大半は隊長の肩もみをやらされるのです。それが一番立ちからずっと一晩中やらされるのです。もんでいると、気持よさそうにいびきをかくのです。いびきをかいてねたと思って、もみ手をとめると、すぐにおきて、どうしてやらんかとどなるのです。それで、連続してもまされてしまいました。

カザンミにきてからのいい点は、南からきて、飛行場への降下する地点になるので、空襲の心配が殆んどなかったことでした。ここでの主な仕事はタコつぼづくりです。製糖会社がトロッコのレールに使っていた鉄を鋸おして作ったハンマーとノミを使って、黙々とタコつぼを掘っていました。そして、タコつぼからはい出して、戦車を爆雷で破壊するという訓練をさせられました。

雨の記憶はあんまりありませんね。想い出すのは、沖糖の近くに演習に出たとき、下地神社近くのできごとですね。そのとき、小雨がふったときですね。そうです。爆音がしましたが、飛行機の姿は見えません。そのうちに、爆弾が眼にみえて落ちてきました。岩のかけにかくれると、近くに落ちたんです。イモ畑におちて、当りがまっくらになりました。大きな穴があきました。それで、かけていきますと、そこにイモも散乱しています。くえたものではないんです。ほんとうは、においがするんですね。それでも、そのくさい生いもをかじりました。それだけうえていたんですね。

び散りました。次の一機もその通り、三機目は、逃げていってしまいました。あれが、日光砲とかいわれたものでしょうね。

#### 戦後の病氣

終戦までは、病氣らしい病氣をしたことはなかったんですが、除隊してからマリアにさいなまれました。かえってすぐから、半年ほどです。髪の毛がパラパラと落ちるまでです。高熱で、生死の境をいったりきたりしました。

生命びろいしたのは慰安所の女たちのくれた薬だったんですね。終戦後二、三か月は、うちの隣のバラックの慰安所に朝鮮出身の女たちがいましたが、その女たちが、うちの母と親しく交わっていたんですね。うちにあるのを何かあげたりしていた関係ですね。私がマリアにかかっているというので、薬をくれたんですね。それで、何とか、いのちびろいしたんです。ありがたかったですね。

話はこちらがいますが、あとで、神経痛もわずらいました。人々は、怪談めいた話をしますが、そんなことではないかも知れませんが。

新里の小学校（今の上野小学校）は、戦前鉄筋コンクリートで、赤瓦の屋根の校舎でした。そこが戦争中は陸軍病院にされたんですね。その今も残っている西の棟の一番北の教室が敬遠されていきます。何かのあたりだということです。この教室を使った鏡原出身の国仲清勇先生も伊良部出身の久貝彰先生も病氣になって亡くなったし、私も神経痛になったのですから、無理ありません。おほらいもやっであるんですね。

カザンミで一番こまったのは、何といっても水でした。どこでもそうだったでしょうが、なま水をのまきなかったんです。島ではなま水をのむんでなれてるからといっても許されません。演習でへとへとなってかえってきても、水がのめないんです。こんなに苦しいことってないんですよ。

お湯をわかしてのむんですね。隊長からしだいにのんでいきます。ところが、初年兵の分までは、残らないんです。親類すじの一年上の兄さんがいましたがね。先に軍隊に入ったというだけで、古年兵ぶっていましたね。古年兵というのはいじわるなものですがね、うちから何かもつてきて、あげるときだけは、何かとほめたたえてくれるんですが、そのときだけで、あとはいじめ通しですね。

このカザンミにきてからは、うちに立ち寄る機会がありました。それだけがたのしみでした。小隊で自活園をもつていた。それを耕作するのは馬とすぎが必要です。それがあるというので、それを借りてうちへ帰るのです。そして、またそれをかえしに行く。つまり一回の農耕で、二回うちへかえれたわけですよ。馬耕をやったあと、水をのませてもらえませんが、それで、泥水をのみましたよ。おもしろかったですね。自活作業のあと、馬をかえす前に、馬を洗いに沼（方言でカズクという）に入ります。そこで友人と二人で、こっそり馬を洗った水のみました。病氣にはなりませんでしたよ。

カザンミでは、飛行場への空襲をよく見ました。ある日、GRAMAより大きい飛行機が三機やってきました。そして降下の姿勢で最初の一機がつこんでいきますと、バット火が上がって、飛行機が飛

### 三、戦争にすべてを奪われた民のくらし

#### 母と戦争

平良町西里 佐久田 静（三二歳）

「『いつか、沖組の宮古島に行くこともあるだろう。そのときは是非、おれのうちを訪ねていってくれ』、そう佐久田君がいいました。そんなことは気にしていませんが、不思議なことに、私はほんとに宮古島にきて、佐久田君の出た宮古中学校に駐屯することになりました。それで、こうしておたずねした次第です。」

齋藤という少尉が、挨拶にきました。

疎開だ、疎開だと、それまで私を説得して準備をしていた母は、このとき、疎開することをやめてしまいました。

そして、毎日のように棧橋通いを始めました。毎日、軍隊がどんなやってくる、齋藤という一緒の処にいたという方さえ、宮古にやってくる、そのうちに息子の潤（末っ子でヤマという童名でよばれる）もこの島にやってくるにちがいない。母はそう思ったのです。同じ死ぬんなら、ヤマと抱き合って死にたい、ということ、毎日棧橋通いを続け、とうとう疎開の機を失ってしまいました。

うちには、母と私しかおりません。兄弟たちはみな一家を構えて、婚期のおくれた私が、母と一緒にいたわけですよ。

母は、齋藤さんの出現以来、配給の煙草を買行列に並ぶようになりました。「私もタバコを吸うんだ。」ということでした。そうで